97-165

序言

題して『宗教小觀』と云ふ。是れ著者が最近一二年間に於て
げる宗教上の論文を蒐輯せる者也。片々の文字初めより
り順序を追ふて作れるものに非ず。然れ共無順序の中
又自ら順序なきに非ず。之を讀まば宗教の本義を知り、
靈的修養に資するに於て少補なくんばあらず。
書中平凡の思想はあらん、然れ共病的、不健全の思想は
之れなきを期す。否、勉めて病的、不健全の思想を排斥し、
宗教に關する正當の見解を與へんとは著者の志願也。

昭和3年4月27日 内務

書中哲學若くは神學に關する議論なし。是れ著者が他日別に一冊となして世に問はんと欲する所也、

明治卅六年三月上浣

著者識

宗教小觀

目次

如何にして宗教の必要を感ずべきや……一
靈の眼を開くべし……五
人生の一大時期(上)……一一
人生の一大時期(下)……一六
生は死よりも眞面目ならざる可らず……二三
時代の要求(上)……九二
時代の要求(下)……三六
宗教と科學(上)……四二

宗教と科學(下)……四七
智識と宗教(上)……五七
智識と宗教(下)……六四
懷疑……七〇
宗教の超絶對性質……七三
信神の最大動機……八〇
祈禱……八七
宗教の實際的要義……九四
先づ神を愛せよ……一〇一
其本に復れ……一〇四
神の王國(上)……一〇七
神の王國(下)……一一二
平凡の福音(上)……一一九
平凡の福音(下)……一二四
耶蘇基督……一三一
基督の教訓は實際に行はれ難きものなるか……一三五
常識……一四二
悔改……一四六
謙遜……一四九
新生に於る三個の異りたる經驗……一五二
我父の家(一)……一五五
我父の家(二)……一五九
我父の家(三)……一六五
我父の家(四)……一七〇

異教に對する態度……一七七

四

宗教小觀

如何にして宗教の必要を感ずべきや

パチエラー、オフ、テヴイニチー　高木壬太郎著

青年あり、來り問ふて云く、我れ未だ宗教を信せず、又未だ自ら宗教の必要を感ぜず、如何にして我れ之を感ずることを得べきやと。世に宗教の必要を感せずと云ふもの豈唯に此青年のみならんや。

世の宗教の必要を感せずと云ふ者、未だ思ひ人生の問題に至りたるとなき也。昔者ヤコブは一夜、夜の明くる迄或人と角力したりしと創世記の記者は吾人に傳へぬ。廣漠たるシリアの原頭、燦爛として輝ける星辰の下に、倨傲尊大にして、名譽心に富める一青年が運命の神と戰へるを

序せる也、吾人もし一度眞面目に人生の問題に思ひ至らんか、何人か自ら一種不可思議なる勢力の手中に在るを感せざるものあらんや、蒲生氏郷は末期の慮外に迫るを見て、『限りあれば吹かねど花は散るものを心短き春の山風』と吟じて、運命の壓制に對し無限の痛恨を洩し、香川景樹は『あらましのこと皆夢と見うるかな、寢るまばかりや我世なるらん』と歌ふて、世事の常に意の如くならざるを歎じぬ、智惠も以て運命に抗するに足らず、力も以て天に勝つに足らず、見よ、楚の項羽は戰へば必ず勝ち、攻むれば必ず取るの名將にして、七十二戰悉く勝利を得しかども、最後の一戰脆くも打敗れて、天下は終に漢高の手に歸しぬ、而して彼は實に自己の兵力の足らざるが爲めに非ざるを知りぬ、故に云く、『戰の罪に非ず、天我れを亡ぼす也』と、ビクトル、ユーゴー嘗てナポレオンの敗北を評して云へり、『ナポレオンは未だ戰に敗れず、モスコーの敗は火にして、ウォートルローの敗は運也』と、運命の手に飜弄せらるゝもの豈唯此等の人のみならんや、吾人は智愚賢不肖の別なく悉く之が爲めに束縛せらるゝ也、抑も吾人は如何にして此束縛より免るべきや、是れ宗教問題の起る所にして、思ひ一たび此に至る、誰れか亦宗教の要を感せざるものあらん、

古人云く、『山中の賊を平ぐるは易く、心中の賊を平ぐるは難し』と、世人は徒に之を聞き、又徒に之を唱ふるのみ、而も若之を身に實驗して自ら味はゝ如何、唯に千萬無量の意義を其中に發見するのみならず、又自ら同情に堪ゆざるものあるを覺ゆべし、見よ、吾人は彼の事をなさゝる可らず、此の事を爲さゝる可らずと、朝毎に誓ふ也、而かも吾人は彼の事も成らざりき、此の事も成らざりきと、夕毎に歎ずるには非ずや、至聖孔子の如きも、『德の修めざる、學の講せざる、義を聞て徙る能はざる、不善改むる

能はざる、是れ吾が憂也』と歎じ、熱誠保羅の如きも、『我れ内なる人に就て、は神の律法を樂めども、我が肢体に他の法ありて、我心の法と戰ひ、我を擄にして我が肢体の中に居る罪の法に從はするを悟れり、嗚呼我れ困苦人なる哉、此の死の体より我を救はん者は誰ぞや』と煩悶しぬ、凡そ世に在りて至誠と眞面目とを以て善を行ひ義を爲さんとする者、誰れか又道の行ひ難きを感せざるものあらん。

人或は以えらく、道德の律法は以て吾人をして善を爲さしむるを得べしと、道德にして若し果して此の如き力を有せば、孔聖も陽明も亦何ぞ道の行ひ難きを歎ずるを要せん、保羅云く、『律法の行に由りて神の前に義とせらるゝもの一人だにあるとなし、蓋律法に由て罪は知らるゝ也』と、然り、道德の大法は唯吾人に罪惡を示し、内心の嚴しき呵責を與ふるのみ、聖賢の苦惱煩悶せし所以のもの偶然に非ざる也。

是に於てか吾人は自己の智慧と意志とに由りて何事をもなし能はざるを悟りぬ、自己の智慧と自己の意志とに由りてなし能はざる所、是れ宗教の爲す所也、宗教の要是に於てか生ず。

故に宗教の必要を認めずと云ふ者は、未だ曾て眞面目に人生の意義を求め、道を行はんとを志したるとなきの徒也、醉生夢死徒に動物的の生活を以て自ら滿足せるもの也、彼等もし一たび人生の意義を求め、道を行はんとを志さば、亦誰れか宗教の必要を感せざるものあらんや。

靈の眼を開くべし

アブラハムの侍妾ハガル其子イシマエルを携へて、ベエルシバの曠野にさまよふ、草叢の水盡きて、將さに渴死せんとして、相對して泣く、神ハガルの目を開き玉ひしかば、彼れ乃ち其傍に水の井あるを見る、即ち草

甕に水を充たし、兒童に飲ましめたり、是れ豈創世記の記者が吾人に傳へたる一古話に非ずや。

ハガルの初め水を見ざりしは、水なかりしがため、非ず、其目の開けざりしがため也。故に、彼が、目既に開くるや、滾々たる源泉の其傍に湧出するものあるを見たる也、靈界の事に於ける、亦之れに類せざらんや。

夫の風の歌ふを聞かずや、耳なきものは、單に其喧囂を聞かんのみ、而かも蕭々たる其調や、限りなき趣を盡して、高松自ら神韻を生じつゝある也、夫の雲の飛ぶを見ずや、眼なきものは、單に其漠々たるを見んのみ、而かも靉靆たる其容や、盡きざるの興を藏して、天際自ら靈相を現はしつゝある也、耳あるものは、叢雨すだく蟲の音にも妙なる音樂を聞くべく、眼あるものは、荒野に咲ける百合の花にもソロモンの榮華を見るべし、況んや著々群生を覆ふの天を見、燦爛大虛を照すの星辰を仰ぐものの、誰か又其中に神の榮光を讀み、造化の妙工を認めざらんや。

豈唯に天事のみならんや、一たび靈の眼を開て之を見ば、吾人は人生の行路に於て吾人が遭遇すべき一切の事物に於て、天の指導、保護、救拯を見るべき也、而して吾人の常に之を見ざるもの、之れなきが爲めに非ず、吾人の靈の眼暗くして之を認むること能はざるがためのみ。

米國の文學者ナサニエル、ハウソーン曾て面白き喩話を傳へたり、其物語に云く、曾てニユーハンプシャイアにデービッド、スワンと云へる少年住しけり、彼は可なりの生れにして、普通の敎育を受けたる上アカデミーに於て一年間古文學の敎育さへ受けたりき、其叔父はボストンに住し、雜貨商を營みけるが、スワンは叔父の商店に操會者たらんため、或る夏の日ボストン指して旅立しけり、彼れ旅の疲れに路傍の綠蔭、清泉湧きづる邊に息ひ、拂々たる凉風に吹かれつゝ、憂時行李を枕に假寢し

たり、許多の旅客の中には知らずして過ぐるものもありしが、又之を見て笑ふて過ぐるものもあり、醉客のよき材料を得たるを喜んで過ぐる禁酒演說者もありき、偶々美麗なる馬車を驅りて來れる老夫婦あり、此紳士は富める商人にして、嚮きに一子を失ひ、遠親中にも氣に入りたる財產相續者なき人也、今や夫人は偶々此好少年の熟睡せる樣を見て、世の憂慮なきものなるを知り、馬車より下りて暫く此少年を見てありけるが、良人と相語らひ、如何にしてか少年の睡を醒さんとなしけり、然るに偶々僕の馬車の用意整へるを報するに逢ひければ、此老夫婦は殘り惜げに此處を立ち去れり、暫くにして一少女あり、來りて少年の睡れるを見、覺えず双頰を紅らめけり、偶々蜂の唸りて少年の上に飛ぶを見しかば、彼女は爲めに手巾を以て之を拂ひ落せり、而かも少年は之を知らずして睡り、少女も亦やがて立ち去れり、此少女は此近隣に住める繁榮なる田舍商人の娘にして、其父はスワンの如き少年を求めつゝありければ、此時もしスワンにして目醒めしならば、或は此少女の父の操會者となりしやも知るべからざりし也、やがて又此處に二人の賭博者來れり、彼等はスワンの行李中に何物の存するやを賭し、もしスワン目醒むるとあらば刺殺さんと匕首を其胸に擬しつゝ、行李を搜索しけり、偶々一匹の犬來りければ、此兇漢等は犬の主人の來らんとを恐れ、退て飲酒に時を移して此處を去れり、スワンは凡て此等の事を知らず、やがて獨り目醒めて馬車を驅りボストン指して往けり、嗚呼、彼れスワンは富の幻像其水の上に金色を投げたりしとも、愛の幻像其潺湲の聲に和して柔かに歎せしとも、死の幻像血を以て其水を染めんと脅かせしとも、凡て之を知らざりし也、此の如く吾人が人生の行旅に在るや、幾多の誘惑と危險とに遭遇しつゝ、而かも之を知らざる也と、

英國の女文學者デーン、インジエローも亦之に類する一話を記せり。少年なる傳令官と題せる物語是也。此物語は則ち此少年傳令官が金錢を懷にして家に歸らんとする途中、追剱に狙はれ、幾たびか危險に瀕せしかども、不思議に其難を逃れて家に歸り、而かも自ら之を知らず、父母に告げて其道中無難なりしを報ずるを序せるものにして、是亦人生の行路には幾多の危險あり、幸に神の攝理に由りて之を遁るゝも自ら之を知らざるを暗指せるもの也。

夫の小兒の嬉戯するを見ずや、彼れ更に危險の何物たるを知らざる也。木に攀ぢては足を踏み外し、石に上りては滑り落つ。見る者をして覺えず、悚然たらしむる也。而かも其危を遁るゝや、實に一髮の間に在り。豈攝理の手の冥々の間に之を支ふるもの勿らざらんや。若し生理學的に之を論ぜば、吾人の身体は既に早く毀損し了すべき也。吾人の起臥飲食常に多く其節に適はざるもの、あれば也。而かも尚健全を保するもの、豈天の加護、救拯の之に伴ふものあるが爲めに非ざらんや。

靈の眼を開きて之を見れば、人事誠に此の如く、天の指導と加護とに待つもの甚だ多し。夫の神の愛と恩惠とを疑ひ、而して又神の存在さへ疑はんと欲するものゝ如きは、革囊を抱きて曠野に泣けるハガルの徒のみ。滾々たる源泉其傍に湧出するものあるに其眼開けざるがために之を見ること能はず、憾むべきの極に非ずや。

人生の一大時期（上）

古歌に云く、

年のうちに春は來にけり一とせを
去歳とや云はん今歳とや云はん

と、是れ即ち春を詠める歌にして、冬尚深く何の氣色も見えざるにはや年の内に春の來るを云へる也、室鳩巣は此歌を引きて儒の修行の法に喩へ「我心に人知らず一念の萠すは獨居の時、暗處の事なれば何の景色も見えず、云はゞ年の内に春の來るに同じ、一念の萠す處に既に善惡の分れあれば、年の内に去歳と今年の分るゝに同じ、去れば千里の謬も毫厘の差より起るといふも此處に在る事也、濂溪先生の幾は善惡と云へるも此事也、是非の境、善惡の關と知るべし、去れば目を放たず此關を守りて、我と我心に善とや云はん惡とや云はんと尋ねつゝ一筋に惡を去り善に向ふこそ我儒の修行の本とする事なれ」と云へり、是れ豈獨り儒の修行の法のみならんや、亦以て移して吾人道を學ぶものゝ法となすべき也、抑も基督の所謂生ける人と死せる人、保羅の所謂靈の人と肉の人、約翰の所謂神の子と惡魔の子なるもの初めより判然として區別せらるゝものならんや、唯隱微の中一念の萠す處に此區別は生ずる也、余が名けて人生の一大時期と稱するものは則ち此隱微の中一念の萠す瞬間の場合也、此瞬間こそ人間運命の分るゝ所なれば吾人は最も注意して之を省察せざる可らず。

歴史家の說に人間の出來事には一大法則の支配するものあり、歴史とは畢竟一の目的、一の意匠の行はるゝを云ふ也と云へり、宗教家は此一大法則を名けて神の攝理といふ、而して此法則なるものは唯人間全般の歴史を支配するのみに非ずして、人は個々別々として皆此一大法則の下に在り、而して此法則は常に一大目的に向て動くもの也、其所謂一大目的とは何ぞや、云く完全なる人類社會を形造らんとの事にして、是又古來より人類の達せんとして爭ひつゝある理想也、耶蘇基督が祈禱の模範として吾人に敎へ玉へる主の祈に「爾國を來らせ玉へ」と云へる

は即ち此神の目的、人類の理想を云ひ顯はせるものにして、使徒保羅が『此は人をして神を求めしめ彼等が或は探り得るとあらん爲也』と云へるも亦此意に外ならず。即ち凡ての人が神を求め、神を發見し、神と交り、神と結合して純潔なる人となり、斯くして全社會全人類が高尚純潔なるものとならんとは、人間歷史の上に顯はれたる神の目的にして、神の攝理なるものは此目的を達せん爲に行はるゝもの也。抑も基督を信ずと云ひ、又之を信せずと云ふ、其意義果して如何、若し是れ單に一宗一派の宗教を信ずると否との義に止らば、之を信ずると否と吾人に於て何かあらん。然れ共深く之を思ひ之を考ふるに、是れ決して一宗一派を信ずると否との問題に非ずして更に大なる意義を有する也。何ぞや、云く、基督を信ずるとは即ち神の目的、人類の理想を信ずる也。之を信じて身を以て此目的、此理想を實現せんとを務むる也。此目的と一致し、此理想と合同する也。之に反して基督を信せざるは神の目的、人類の理想を信せざる也。既に之を信せず、故に此目的に向て進行せず、此理想と一致せざる也。然れ共吾人假令此目的に向て進行せず、此理想と一致せざるも神の目的は必ず遂げられざる可らず、人類の理想は必ず實現せられざる可らず。保羅云く『我儕信せずと雖も彼は誠也、彼は已に違ふと能はざる也』と。基督云く『此石の上に墜つるものは壞れ、此石上に落れば其もの碎かるべし』と。基督を信せざるはたとへば身を以て石の上に落とすが如し、其身の粉碎せざるものあらんや。基督を信ずると否とは人生の運命に關するといふもの實に之が爲也。

故に神は人類を愛し、常に吾人を導きて救の道に入らしめんとなし玉ふ也。基督云く『我を遣はしゝ父もし引かざれば人能く我に來るなし』と。神の常に人を引きて基督に來らしめんと勸めつゝあるを云ふ也。然り

神の靈は常に吾人の耳にさゝやきて吾人を招き玉ふ也。此隱微のさゝやきを聞きて之を受くると否とは即ち一念の萌す處にして人生禍福の分るゝ所也。吾人は此一大時期に處して果して如何になさんとするか。

人生の一大時期（下）

吾人は今歷史上の人物に就き彼等が如何に此一大時期に處したりしかを見るべし。

イスラエル人の祖アブラハムはメソポタミヤに生れたる人也。一日榮光の神彼に顯はれて云ひけるは『爾の國を出で、爾の親族を離れて我が爾に示さん所の地に至れ』と。是れ彼が心の耳にさゝやきたる隱微なる神の聲にして、彼が生涯の善惡禍福は此聲に從ふと否とに由りて分たれたりし也。何となればメソポタミヤに止まるは是れ偶像信者として安ずるとにして、之を出づるはエホバに從ふとなれば也。果然彼は隱微なるさゝやきに從ひ、其往く所を知らずしてガルデヤ人の境を出でたり。彼の生涯の新時期は爰に於て始まれり、彼は神に祝せられたり、此の如くして彼は信仰の父となり、イスラエルの祖となれり。嗚呼一瞬時此一瞬時は實にアブラハムを造り、イスラエルを造りたりしも也。

若し夫れイスラエルの救主にして且律法者なるモーセに就て之を云はんか。彼はパローの王宮に育てられ、埃及人の學術を敎へられ、言と行とに力ありしが、一日出でゝ一人の埃及人のイスラエル人を擊つを見たり。彼が生涯の危機は實に此時に在りき。何となれは隱微の聲は此時彼にさゝやきて云へり、云く、『爾パロの女の子と稱せらるゝよりもイスラエル人の兄弟と稱せらるべし、暫く罪の樂を享けんよりは寧ろ神の

民と共に苦難を受くべし、基督の爲に受くる誹謗は埃及の貨財よりも貴し』と。之に背くは易く之に從ふは難し、然れ共彼は目前の平安幸福に其眼を昏まさるゝことなく、斷然志を決して神の聲に從へり。危機一髪、彼の新生涯は此瞬間に始まれり。イスラエルの救主舊約の律法者は此の如くして造られたりき。

更に新約の大立物使徒保羅を見よ、彼はダマスコに往く途中忽ち天よりの光にめぐり照されたり。『サウロ、サウロ何故我を迫害るや、爾荊ある鞭を蹴るは難し』との聲を聞けり。彼は此中に神の聲を認めたり、故に彼は答へて『主よ、我に何を爲さしめんとし玉ふや』と云へり。彼は遂に一身を献げて異邦の使徒となれり。ダマスコ途上の瞬間は實に彼が一生の運命を定むる大危機なりし也。基督教會の歴史も、世界の歴史も此微妙の機に依て決せられたるを思はゞ人生の危機に處するも亦難い哉

夫の聖オウガスチンは如何にして悔改めたりしや。彼れプラトーの著書を讀み、又ミランに於て監督アンブロースに逢ひて基督教を聞き、上帝の性質を明にし、人類の墮落と神の恩惠を知りしかども未だ自ら罪を悔い之を改むるの勇氣なく、而かも罪に責めらるゝと甚しく今は如何ともすると能はざるに至れり。於是獨り人なき處に退き、涙を灑ぎて我が決心の弱きを歎せしに、偶々聲あり云く『取て讀め』と。彼即ち手にする聖書を開きて之を讀むに、偶々羅馬書十三章十三四節の上に其眼光は落ちたり。而して是れ宛も彼が三十年來行ひ來りし罪惡を列擧して之を責むる聲なりしかば、彼は慨然として深く既往の罪を悔い、奮然志を改め心力を盡して基督に從はんとの決心も起したり。彼が將來基督教會の大聖神學界の祖となりしもの實に此瞬間一念の萌せし處に胚胎したりし也。

更に宗教改革家ルーテルの事を云はんか。彼が最も親交せる友アレキシス忽焉幽冥の客となる。彼は此に於て深く人生の無常に感じ神學研究の志を起し、鄕里に歸りて父に謀りしに父之を許さず。彼は心ならずも法學を學ばんとして再びウォルフォルト府へ向け發足し、都府近く來りし時忽ち雷にうたれて倒れたり。是れ即ちルーテルが一生の運命を決する一大時期なりき。此日着校の後直ちに同窓の諸友を招き離別の宴を開き、父にも謀らず、朋友の止むるをも聞かず、ウォルヂルの詩集とプロータスの戲曲を懷にし、風死し草眠るの夜を冒して僧院を叩き身を塵外に委したりき。他日彼が震天動地の宗教改革を爲し、近世歐羅巴洲思想自由の源を造りたるもの、實に此一瞬彼の心に道念の萠せるに始りたりし也。神の攝理も亦奇ならずや。

クロンウエルは憂鬱病を患へ、夜中屢々醫師の診察を受けたることありしといふ。此の如く彼は長き間憂鬱に沈み、時としては死に瀕せりと思へることあり。彼れ此頃廿二三歲なりしが、大に感ずる所ありて遂に基督教を承認するに至れり。而して彼は非常なる喜悅を以て其悔改を永遠の死の口よりの救と云へり。然り、彼が後清教徒の模表として英國歷史に一種の光彩を添えたる其源は彼が四隣人靜に獨り神の聲を聞きたる其瞬間に在りし也。

以上は歷史上著明なる二三の人物に就て、彼等が人生の一大危機に臨でよく神の聲に從ひ一生の運命を定めたりし事例を示せるもの也。カライルは此時期を稱して是れ即ち上に向ふか下に向ふかの決着點、神と結ぶか惡魔と結ぶかの歸着點也と云へり。然り、人生の運命は唯此一瞬時に決す。此機に處するもの最も深く心を用ゐざる可らず。而して此一大時期なるものは多くは青年壯時に於て來るが如し。アブ

ラハムがメソポタミヤを出でたるは其何歳の時なりしか詳に之を知るに由なしと雖も、其年尚壯なりし時に在りし事亦疑ふ可らず。モーセが奮然起ちてイスラエルを救はんと志したるは四十歳の時なりしといふ百廿歳の壽を有てる彼には是れ青春の妙齡なりし也。保羅の悔改めたりしは紀元三十七年にして、其敎の爲に殺されしは紀元六十六年なりしと云へば、彼が異邦使徒たるの召に應じたりしは思ふに三十歳以下の時なりしなるべし。オウガスチンの悔改めたりしは卅歳の時にして、ルーテルの僧院に身を投じたりしは二十一歳の時なりき。而してクロンウエルの基督に從ひたりしは廿二三歳の時なりしと云へば、所謂人生の一大時期、生涯の運命の關は青年の時に在りといふべし。而して此一大時期の來るや、或はクロンウエルの如く疾病之が機會となることあり、或はルーテルの如く友人の死之が機會となることあり、或はオウガスチンの如く罪惡の悔恨之が機會となることあり、或は保羅の如く特別の天啓を受くることあり、或はモーセの如く同胞の災害之が機會たることあり、神の人を導くや其道千差萬別にして各相同じからすと雖も彼は常に人の心にさゝやきて、我に來れといふ也。嗚呼青年の人よ、諸子豈此神の聲を聞かざらんや、否諸子は今聞きつゝある也。諸子が上に向ふか下に向ふか、神と結ぶか惡魔と結ふかは諸子が此隱微の聲に從ふと否とに依りて決する也。『綠なる一つ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける』人生の一大危機に處するもの深く思ふ處なくして可ならんや。

生は死よりも眞面目ならざる可らず

吾人曾て一友人の重き病に罹り、其將さに死せんとするに侍して、死の誠に嚴肅なるものあるを見たり。人は平生神を信せず、未來を笑ふも其

死に臨みては誰れか嚴然として襟を正さゞらん。パイロン、ボルテーアの如き不信者も其死に瀕するや尚恐懼を以て戰慄したりしといふも、蓋し之か爲也。支那人云く『鳥の將に死なんとするや其聲哀し人の將に死なんとするや其言や善し』と。亦死に臨みて己に歸るをいふ也。

勿論世には死に臨で尚諧謔を弄するものなきに非ず。夫の念佛坊の辭世に『來て見ても來て見ても皆同じ事、此處らでちよつと死んで見ようか』といふが如き、何處迄も人生を馬鹿にしたるものといふべし。又十返舍一九が『此世をばどりやおいとまにせん香のけむりにつひに灰左樣なら』といふが如き、如何に滿身滑稽を以て成れりとは云へ、辭世としては寧ろ輕浮の譏を免れざるべし。曾呂利新左衛門病んで將に死せんとす。豊公床に臨み、身後に欲する所を問ふ。新左語なく、狂歌一章を作り之を献ず。云く『御威勢で三千世界手に入らば極樂淨土我に賜はれ』と。是れ

蓋し豊公天下を服從し、癘瘧未だ癒えざるに方り更に征韓の師を起し内困弊を致すを知らざるを以て之に依りて諷刺したるもの、深く咎むるに足らずと雖も、由來佛敎の思想に養はれたるものは稍もすれば嚴肅の念を欠くの觀有り。蓋し彼等の信ずる處に依れば、夫の一休が『何事も皆僞りの世なりけり、死ぬるといふも眞ならねば』と云へりしが如く、世界といふも、人間といふも、生といふも死といふも畢竟假の相に過ぎざるなり。死に臨みて尚眞面目の念を欠くもの故なきに非ず。然れ共人情は遂に曲ぐ可らず、生を去て死に就く、誰れか往を考へ來を思ひて無限の感慨に沈まざるものあらん。豪邁秀吉が尚『露とおき露ときえぬる人の世や難波のことは夢の又夢』と長大息したるもの、亦嚴然として襟を正したるものに非ざらんや。

然り、死は人をして嚴肅ならしむ、又死に臨んでは實に嚴肅ならざる可

らず。

死既に嚴肅なる可くんば何が故に生は嚴肅ならざるべきか、吾人は思ふ、生は死よりも大切にして而して生は死よりも嚴肅ならざる可らずと。

古來宗教と云へば死と死後を說くものにして、生と生前を說くものに非ずと思ふものあり。死後の冥福を祈ることを知れとも生前の生活を疎になすものあり。死の嚴肅なるべきを知りて生の嚴肅なるべきを知らざるものあり。思はざるの甚しきもの也。基督教は素より死を輕じ死後を輕ずるものに非ず、然れ共其最も重を置くは現世の生活也。現世は因にして未來は果也。未來の賞罰ありて現世の生活あるに非ず。現世の生活ありて未來の賞罰ある也。故に吾人は今日といふ今日最も嚴肅にして且眞面目なる生活を爲さいる可らず。

由來邦人の弊眞面目ならざるに在り。英人バーチット曾て我國に來遊し、歸國後一雜誌に書を投じ邦人の特性を論じて云く、『日本人は舊約なきの民の如し、彼等に必要なるは天國の福音に非すして地獄の敎訓也』と。中江兆民亦其『一年有半』に於て邦人の短所を指摘して云く、『邦人特性和易にして放慢に流れ易く、坦率にして狎濵に陷り易し嚴毅と莊重とは其短とする所也』と。兩者の言期せずして相合す。其實に然るが故に非ずや。抑も吾人は如何にして莊重嚴正の生活を爲し得べきか、云く敬畏の念を養ふに在り。イスラエルの詩人歌て云く、

エホバよ爾は我をさぐり我を知り玉へり、爾は我坐るをも立つをも知り、又遠くより我念を辨へ玉ふ、我れ何處に往きて汝のみたまを離れんや、我れ何處に往きて爾のみまへを遁れんや。

と神は天地に充滿す、我は此聖き神の前に在る也、立つも坐するも我は此神を離るゝ能はず、支那人の所謂君子は屋漏に恥ぢざるもの、吾人一度此神を知る、豈敬畏の念生せざらんや、既に敬畏の念生ず、又何ぞ放慢狎濵なるを得ん、於是乎莊重端正なるべく、嚴肅眞面目なるべし。

吾人は又吾人の言ふ所行ふ所に責任を有するを知らざる可らず、基督云く、『我れ爾曹に告げん、凡て人の言ふ所の虚言は審判の日に之を訴へざるを得ず、夫れ爾其言ふ所の語に由りて義とせられ、又其言ふ語に依りて罪ありとせらるゝ也』と、吾人は吾人の虚言、吾人の譏謗吾人の狎濵吾人の不德に向て責任を有する也、一言豈苟くもするを得んや、一言既に苟くもすべからず、於是乎莊重端正なるべく、肅嚴眞面目なるべし、今や上下益々放慢にして又莊重嚴正なる人なし、吾人幸に神を畏敬するを知る、是れ豈吾人が益々莊重端正にして、嚴肅眞面目の福音を天下に呼號すべき時に非ずや、

時代の要求（上）

パリサイとサドカイの人來りて天の休徴を求むるや、基督之に向て答へて云く、『爾曹夕には夕紅に由りて晴ならんと言ひ、晨には朝紅又曇に由りて今日は雨ならんと云ふ、僞善者よ、空の景色を別つことを知りて時の休徴を別ち能はざる乎』と、當時の世は傳説的、形式的宗教の盛に行はれたりし時代にして、夫のパリサイ、サドカイの徒は即ち傳説的、形式的宗教家なりし也、人心は既に傳説的宗教を厭ひ、形式的宗教に倦みたりしも、彼等は徒に時代の皮相を觀察して其眞相を看破すると能はざりし也、彼等は朝紅又は夕紅に依て天氣を卜するが如く、社會の表面に顯はれたる事實に依て僅に時の傾向を卜し得たりしも、深く社會の裡

面に入りて當代の潮流を察し、人心の要求を領解すること能はざりし也。故に彼等は基督を迫害し之を十字架に釘けて勝利を得たりしかども、是れ唯一時の現象にして、彼等は忽にして人心を失ひ、彼等の宗教は忽にして滅亡したり。之に反して基督は迫害せられ、鞭たれ、殺されたりしと雖も、彼は忽にして蘇り、彼の宗教は忽にして四方に傳はれり。彼は則ち時滿ちて此世に來れるものにして、時代の眞相を觀察し、人心の要求を滿足せしめたるものと謂ふべし。

凡そ何れの世、何れの時代に在りても二個の潮流なるものあり。否二個の潮流あるに非ず、二個の潮流あるか如く見ゆる也。宛も夫の兩岸の間を流るゝ河流の如く、時には其上に泡沫の浮ぶこともあるべく、又時には旋渦の逆流することもあるべし。然れ共泡沫も旋渦も是れ表面の現象のみ、河底には自ら一定の潮流あり、常に兩岸に導かれて遂に海に入る也。時代の潮流なるものも亦此の如し。表面には泡沫の浮ぶが如きこともあるべく、旋渦の逆流するが如きこともあるべし。然と雖も其裡面には常に神に導かれて流るゝ一定の潮流ある也。皮相の觀察家は其泡沫を見、其逆流を見て之を以て直に時代の潮流也、人心の要求也と思惟する也。基督時代のパリサイ、サドカイの徒即ち是れ也。然れ共吾人は決して外面の出來事に欺かれ、皮相の觀察に滿足すべからず。宜しく天の鼓吹を受けたる洞見を以て直ちに時代の眞相を見、人心の要求を領解せざる可らず。

抑も今日吾人の生息する時代は如何なる時代也といふべき乎。思ふに是れ唯日本の歷史に於てのみならず、又世界の歷史に於て最も興味ある時代也といふべし。素より今日は尙過渡の時代にして、今後廿年若くは三十年我日本は今日の如く變遷して止まざるべし。然れ共此變遷極

りなき中に在りて、一定の潮流なくんばあらず。抑も現時代に於て人心の要求する所果して如何、基督教の之に對する關係果して如何、吾人請ふ試に之を左に述べん。

第一、現今の時代は物質以上のものを要求す。吾人若し皮相のみを觀察せば今日實際の有樣は寧ろ之と反對せるものあるを見るべし。之を近世思想の傾向より論ずれば、今日は唯心論の時代といふよりも、寧ろ實體論の時代といふべし。見よ、唯心論のカント、フイヒテ、ジエルリングを經てヘーゲルに至り其發達の頂點に達するや、俄然「實體論」に歸れとの呼聲は、近世思想界の一隅に起りて其全体を風靡したり。而して他方に於ては科學の進歩は科學的、歴史的討求の精神を勵まし、從て觀察、實驗を重ずるに至り、其極科學の万能力を信じ、實驗以外の者を以て悉く迷妄也と斷ずるものあるに至れり而して是れ又我國近世思潮の傾向なりしと云はざる可らず。翻つて國民實際の生活を見れば吾人は一言以て物質的の世の中也と斷せざる可らず。見よ、國民は上下擧て富を積むに忙はしく、世は悉く拜金宗の信者たるに非ずや。夫の政客が寢食を忘れて國事に奔走するも、國家の爲に非ずして金錢の爲也。夫の學者が孜々として書を著すも、研究の結果を公にせん爲に非ずして金錢を得ん爲也。學者、政客尚然り、況や其他のものをや。從て彼等が人生に關する理想なるものは極めて低く、居宅を大にし、衣服飲食を美にし、出でゝは車馬に跨り、入ては妾婢に驕るを以て人生の樂事極れりとなすもの比々皆是也。彼等は以爲らく文明とは蒸滊、電氣等の力を利用して百事を便利ならしむるの謂にして、幾艘の軍艦を造り、幾多の軍隊を養ひ、商賣を盛にし、工業を起すは富國强兵唯一の手段なりと。而して此外別に所謂精神的文明なるものあるを知らざる也。此の如き國民の精神は發して

卑猥の文學となり、卑汚の美術となり、淫靡の生活となり、野蠻の風俗となる國民に高尚の理想なくして、舉世滔々腐敗の渦中に在るは是れ豈現時の狀勢に非ずや。

然れ共吾人は直ち之を以て現時代の眞相にして、人心の要求するものは物質也と斷定すべからず。否世は既に物質のみの文明に倦み、人心はパン以上、金錢以上のものを要求せり。夫の近世の思想界が實體論に歸らんとするの傾向ありしは、放外なる唯心論に反動せる結果一時此の如き現象を現出したりしに過ぎず。裡面には依然として唯心論の潮流徐々として流れつゝあるを見るべし。之を我國の思想界に徵するも亦然ざるはなし。明治維新の後我國の學者が一たび西洋の實學に接するや、以爲らく倫理道德の學は空理空言にして、宗教は迷信の結果に過ぎずと、之を以て彼等は道德を論じ宗教を議するを以て寧ろ恥づべきと也となしたりき。然るに今や然らず、宗教と倫理の問題は今日學者が最も熱心に又最も眞面目に論議する所のものにして、今日の新聞雜誌にして此問題に觸れざるものの殆ど之れなしと云ふも過言に非ざるなり。

勿論今日の學者の宗教論と稱するものは、之れを吾人の立脚地より觀察すれば尙甚た幼稚未熟なるを免れずと雖も、彼等が眞面目に之を論議するに至りしものは畢竟時代の要求に驅られたるに外ならず。蓋し我國は此三、四十年間に於て古今未曾有の大進歩を爲したり。之を英米の諸國に比すれば尙未だ後進國たり、貧弱國たるを免れずと雖も、而かも國民の富は此十數年間に於て非常に膨脹し、國民の智識も亦此間に於て非常に進歩したり。而も此富と智識とは未だ以て個人を救ひ、國家を救ふと能はず。人は愈々富んで愈々墮落し、益々滅亡の淵に陷らんとす。宛も是れ夫の放蕩息子が豚を蓄ふて其豆莢を食するも尙其饑を醫

すと能はざるが如し。心竊に家を懷ふて父に歸らんとするの念勃々たるものあるは誠に宜也といふべし。嗚呼是れ實に我國現時代の眞相也。僅に皮相を觀察して是れ物質的の時代也といふものは未だ以て深く語るに足らざる也。

時代の要求（下）

第二、現今の時代は希望の哲學、希望の人を要す。吾人は必らず、しも、時代を謳歌するの士を要せず。「平康、からざる時に、平康、平康といふ」僞預言者は、素より吾人の要する所に非ず。然れ、共吾人は又彼の世を罵り、人を嘲り、妄りに亡國を唱へ、絶望的哲學を傳ふる厭世家をも要せざる也。若し夫れ社會の暗黑面のみを見ば、何れの世か失望せざらんや。政治は腐敗し、實業は墮落し、文學は淫靡に流れ、宗教は儀式に陷り、家庭の風儀は亂れ、社會の綱紀は弛廢せり。於是吾人は以爲らく、世は澆季に赴けりと。然れ共是れ唯社會の一方面のみ。仔細に點檢し來れば其腐敗し墮落せりと思惟せるものも、進歩の過程に存する欠陷にして、深く憂ふるに足らざるものなるを發見すべし。今や我國は古來未曾有の大變革に接し、百事更新するの時に方り新舊の分子、東西の思想、端なくも爰に會合撞突して、千古の奇觀を呈すると共に、社會の紊亂、綱紀の廢頽を來せり。此間素より憂ふべく、歎ずべきものなきに非ずと雖も、要するに是れ過度の時代に方りて免るべからざる欠陷にして、若し夫れ眼を轉じて更に他方面を觀察すれば、吾人は亦洋々たる希望に滿たずんばあらず。蓋し我國の社會が今日の如く紊亂し腐敗したるが如き形狀を呈せるは、萎靡衰廢したるが爲に非ずして寧ろ活動の結果也と云はざる可らず。夫の社會問題の起れるは必ずしも今日の資本家が昔日の資本家よりも無

慈悲なるが故に非ずして、勞働者の權力增加したるが爲め也。夫の慈善家の甚だ起らざるが如き觀あるは必ずしも今日の人が昔日の人よりも慈悲心に乏しきが故に非ずして、社會の公共心發達したるが爲め也。今日の文學が淫靡なるか如く見ゆるも、今日の宗敎が無勢力なるが如く見ゆるも、畢竟國民の智識と道德的意識の進歩したるが爲にして文學其物の衰微、宗敎其物の廢頽を證するものに非ず。假りに今日の社會は腐敗したりとするも、人心は腐敗せる中に在りて尙ほ正義を求むる也。昔者エリヤ、イスラエルを神に訴へて云く、『主よ、彼等は爾の預言者を殺し、爾の祭壇を毀てり、唯我れ遺されたりしに又我が生命をも求めんとする也』と。然るに神は何と答へ玉ひしぞ。云く、『我れ自己の爲にバアルに跪かざる者七千人を存せり』と。『是の如く今も尙恩の選に由りて遺れる者あり』。淸きもの、醒めたる者豈唯我れ一人のみならんや。亦何ぞ徒に悲歌を唱へ、湘流に赴て魚腹に葬らるゝを要せんや。見よ、基督の時は社會の最も腐敗したりし時也と稱す。彼れ當時の學者、宗敎家を責めて云く、『爾曹は白く塗りたる墓に似たり、外は美はしく見ゆれ共、內は骸骨の諸の汚穢にて充つ』と。世は彼を侮り、彼を厭ひ棄てたり、彼は實に四面楚歌の中に陷りたりき。而かも彼れは洋々たる希望を湛えて云く、『我れ爾曹に告ん、目を擧げて見よ、はや田はいろづきて收穫時になれり』と。彼れ十字架に釘けらるゝに方りて其弟子に云て曰く、『我れ既に世に勝てり』と。希望の眼を以てすれば、寂寞たる原野の中に穰々たる熟田を見るべく、暗黑なる死の中に光明ある生命を見るべし。不平と絕望は何物をも救ふと能はず。悲憤と慷慨とは何物をも益すると能はず。我社會我國家の今日要するものは希望の哲學也。大なる希望を以て自ら働くもの也。現今の我國家は唯此の如き哲學、此の如き人に依りてのみ救はるべき也。

第三、現今の時代は社會的責任の念を要す。之を表面より觀察すれば個人主義若くは利己主義なるもの尙甚だ盛にして、其社會主義と稱し、愛他主義と稱するものも、畢竟個人主義若くは利己主義の假裝せるものたるに過ぎざるの觀なきに非ず、然れ共人は決して長く利己主義に滿足するものに非ず。社會は決して個人主義のみに由て成立するものに非ず。今や世は漸く社會的責任の念を感じ、人類共通の利益に注目するに至れり。夫の基督が『我れ彼等の爲に自を潔む』と云ひ、『人其友の爲に生命を棄つ之れより大なる愛はなし』と云ひ、保羅が『爾曹は各々肢也』と云ひ、『爾曹彼此の勞を任へ』と云へる眞理が實際に於て漸次世人の理解する處となり來りしは注目すべき事實也とす。我國民は久しく封建制度の下に養はれたりしを以て其結果一種の義俠心發達したりしかども、近時舊道德の頽廢と共に此義俠心なるものも亦殆ど滅絕し、人々皆利己あるを知て愛他あるを知らず。所謂社會的責任の念の如きは世人の曾て知らざりし處なりき。然れ共人心は決して長く此の如き狀況に滿足すると能はず。其奥底には早く既に社會的精神の橫流するものあり夫の近年公德問題が著しく世人の注意を惹きしが如き、公共の爲に多少の寄附を爲すものゝ生じ來れるが如き、社會問題、勞働問題等の漸く世人の口に上るに至りしが如き、亦以て人心の向ふ所を見るに足るべし。誰れか云ふ、人は利己の動物也と。假令人は悉く利己の念を棄つると能はずと雖も、彼は更に高尙なる理想と責任の念を有す。唯利己心を養ふて以て人心を滿足せしめんとするは未だ人類の何物たるやを知らず。社會の何物たるやを知らざるもの也。

以上述ぶる所にして、果して眞なりとせば、基督敎の使命も亦大なる哉、何となれば現今の時代が要求するものを與ふるは唯基督敎あるのみ

なれば也、使徒保羅云く、『夫れ信仰と望と愛と、此三のものは常に在る也、』と、然り、人は常に此三の者を要す、人はパンのみにて生くるに非ず、神の口より出づる凡の言に由ると錄されたり、人は決して物質のみを以て滿足すると能はず、神を認め、神を信じて爰に眞の智惠、眞の生命、眞の安心生ずる也、而して希望は此の如くして生じ、愛心は此の如くして萠す、人心の要求するものは即ち是れ、之を滿すものは即ち基督教也、基督教の使命も亦大なる哉。

宗教と科學（上）

今日我國に在りて宗教に關する最大なる疑惑は科學との關係なるべし、今日の所謂智者學者と稱するものも、宗教の實際に於ける力を認めざるには非ざれども、彼等一般の信ずる處に依れば是れ畢竟迷信の餘勢にして、彼等は科學の進歩するに從ひ早晩宗教の倒るゝ時代來るべしと思惟するが如し、然らば是等の人は十分宗教の性質、要素なるものを研究して、科學との關係を明にし、而して後兩者の衝突を認めて斯く考ふるに至りしものなりやと云へば、先づ十中の九恐らくは十人が十人迄左までの研究をなして此決論に達したるには非ず、唯漫然として斯る議論を弄するか、然らざれば斯る疑惑を有するに過ぎざるが如し、宗教と科學との關係を詳に論ぜんとせば勢ひ宗教哲學に渉りて、古來之に關して哲學者、宗教家の研究し來りたる處を述べざる可らず、思ふに今日より以後此問題の進むに從ひ斯る必要あるべきは甚だ明なる事也と雖も、今は唯世人が宗教と科學の關係に就き抱ける疑惑の無用なるとを辨ずるを以て足れりとすべし。

抑も世人をして宗教と科學との關係に就て疑惑を起し、宗教は到底科

學と兩立すべからざるものなるかの如く思惟せしめたるものは何ぞ云ふまでもなく近世科學進歩の結果也第十九世紀は一方に於て基督教の進歩甚だ著しかりしに拘はらず他方に於て科學は更に著しき進歩發達をなしたり ベンジャミン、キッドの如き學者は第十九世紀の特色は科學の發明應用にも非ず工業の進歩發達にも非ずして人情主義の發達人間相互間に於る同情の進歩也といへり之を一方より見れば左る事乍ら更に他方より見れば科學の進歩は實に第十九世紀の一大特色にして世界は科學の發明應用に依りて一大變化を生じ凡てのものは皆其影響を蒙りたり左れば宗教も亦其影響を免るゝと能はず其結果として一時宗教と科學とは到底兩立すべからざるが如き觀を呈したるは亦餘儀なき事といふべし

宗教なるものは元來保守的の性質を帶ぶるもの也隨て宗教家が一般に保守的なるは自然の數也去れば近世科學の進歩するに方り宗教家は新に起る所の科學を以て宗教の發達を害する異端邪説となして之が成立を妨害せんと試みたり夫の地質學者が地球の年代に關し驚くべき發見を爲したりし時之れを以て基督教の信仰を動すに足る恐るべき邪説となし又ダルウインが初めて進化説を唱へたる時之を以て有神論の根據を毀つものとして頻りに之を排斥せんと勉めたりしが如きは即ち其一例にして一見宗教と科學と衝突せるが如き事實ありしは歴史上明なる事なりとす是れ獨り昔日に於てのみならず今日に至ても尚稍もすれば日進の學術に反對せんとする狹隘偏僻なる宗教家全くなきに非ず此の如き事實を認めて宗教と科學とは到底兩立すべからざるものゝ如く思ふに至りたる事ならん是れ一應尤なる事にして世人をして斯る疑惑を抱かしむるに至りたる責は宗教家自ら之

を負はざる可らず。然れども是れ決して宗教と科學との衝突には非ず。宗教の說明者が自己の宗教と科學上の眞理を理解せざりしより起りたる一時の出來事にして、既に科學上の眞理明白となり、又よく自己の宗教を了解せる曉に至りては宗教家も往日の誤を棄てゝ科學上の眞理を承認するに躊躇せざる也。現に今日の基督教なるものは又昔日の基督教に非ず。地質學發見の當時こそ之を以て聖書の說と異れりとして排斥せんと試みたれども、今日に至りては地質學の敎ふる所に反して聖書の敎訓を立んとする者あらず、又進化說の如き唯に之を排斥せざるのみならず、之を聖書中の思想及び基督敎會と其眞理の發達を說明する鍵鑰として採用するに至り、神學上大なる變化を來したり。要するに今日最も進歩したる宗教家は科學の眞理を輕蔑するものに非ず。否之を歡迎し之に依て宗教上の事實を說明せんとする也。世の學者は此邊の事情に暗きが故に基督敎を以て依然たる吳下の阿蒙なるかの如く思惟し、さては科學と宗敎とは兩立し難し抔の心配も起ることなれ共、是れ誠に無用の心配ところ云ふべけれ。

吳下の阿蒙

宗教と科學（下）

宗教と科學とは兩立し難しとの疑惑を起したる他の理由は蓋し科學者の基督敎に對する態度なるべし。思ふに科學者の宗敎に對する態度には三の別あるが如し。即ち第一種の科學者は全く宗敎に無頓着なるもの也。第十九世紀の學問世界に於て最も著しき現象の一は專門研究法の進歩にして、即ち宗敎家は宗敎の宣傳に一生を委するが如く科學者は各自其專門の學科を研究するが爲に其生涯を費せり。故に科學者なるものは自己專門以外の事に向ては更に注意せず。而して其專門以

外の事に無學なるを以て更に恥辱とせざるのみならず、寧ろ之を以て榮譽となすが如き傾向なきに非ず。從て彼等は宗教に對しては一切無頓着也。然るに前既に述べたるが如く第十九世紀に於ける科學の進歩は、甚だ著しく、其文明に寄與したる功績莫大なれば、科學者の宗教に無頓着なる有樣を見ては、先づ第十九世紀文明と宗教の緣故なきを推察し、從て宗教と科學との不調和を想像するに至れるはあり得べき事也、といふべし。然れども吾人は一種の科學者が宗教に冷淡也といふの故を以て直ちに斯る想像を逞ふす可らざるは云ふまでもなし。

然れども宗教と科學とは到底兩立すべからざるが如き疑惑を起さしめたる最大原因は、蓋し夫の所謂經驗學派と稱するものが經驗を以て主義とし實驗に依らざるものは一切空想迷信と呼び、而して科學を以て宇宙万般の事を説明し得べしとなしたるに在るが如し。魯西亞のトルストイ伯は近世此傾向の甚だ盛なるを見て『科學の迷謬』と題する一篇を著し、科學が唯實驗法に依りて、實驗以上のものを拒む傾向あるは誤謬の甚しきもの也との事を論じたるとありしが、實驗學派の誤謬は科學の實驗以外に眞理を見ると能はざるに在り。若し此宇宙には器機的若しくは物質的のもの丶みにして心靈的なるもの一切之れなしと云はゞ、科學は宇宙萬般の事を説明し得べしと雖も、此宇宙は單に物質的のもの丶みに非ずして、又心靈的のものを有する也。萬有の原因は實に物質的に非ずして心靈的也、人は唯に物質的なるのみに非ずして亦心靈的也、彼は唯に理性を有するのみに非ず又道德宗教の念をも有する也。抑も科學の採用する方法は實驗的にして、其研究する所は外界に顯はれたる現象、即ちホワット、イズといふ事に過ぎず。例之靈魂の問題に就て之を云はんに、科學者は其實驗的の方法に依り腦髓を解剖して

靈魂の存在を認むると能はず、於是心理の作用は畢竟腦髓の動作に過ぎず、別に靈魂なるものあるに非すとの結論に歸着するとあるべし。是れ科學としては相當の結論にして何人も之に異論を唱ふ可らず。宇宙の原因即ち神の問題に至ても亦然り、科學は自然の現象を研究して其間に行はるゝ法則を發見し、萬般の現象に對して一々之を說明すべしと、雖も、神の存在に就ては論證し能はずと結論すべし、是れ又科學としては如何ともすべからず。然れども科學は靈魂の存在を論證し能はざるが故に靈魂不滅の信仰は空想也と論じ、科學は神の存在を證明し能はざるが故に神を信ずるは迷信也と論ぜば是れ誤謬に陷れる也、何となれば科學なるものは前既に云へる如く、現象世界以外に出づることを能はざるもの也、而して神若くは靈魂の問題は形而上學若くは宗教の議論にして、形而下學の範圍に屬すべきものに非す。科學以外に哲學あり、宗教あり、而して心靈上の問題は哲學者及び宗教家の範圍に屬するものにして科學者の妄りに容喙すべきものに非す。故に若し科學者にして之に容喙し、唯科學の立脚點より之を評して迷信也、空想也と云はゝ是れ他の範圍を犯せるものにして所謂門違の事をなせるものといふべし。素より宗教は當代の科學に反對して立つものに非す。故に若し宗教にして當代の科學に反對するが如き信仰を有せば此信仰は立ろに倒るべし。然れども宗教にして科學に反せるが如き信仰を有すると、なくんば、此二者は各其範圍を異にし、兩々並行して立つべきは宛も科學と美術と其範圍趣味を異にして尙並行するが如くなるべし。例之一片の花の如し、科學者は之を取り、之を分析し、之を解剖し、其花の何れの種類に屬するやを問ひ、其雌雄蕊の幾何ありやを研究すべし。而かも彼は其爛熳なる美と其馥郁たる香氣を認めざるべし。然れ共美と香氣と

を去て花の何たるを解すと云はゞ如何皎々たる一輪の明月、天文學者より之を見れば是れ唯地球の周圍を回轉する一箇の冷塊に過ぎざる也、而もか詩人は『今夜月明人盡望、不知秋思在誰家』と吟じ、又『月見れば千々に物こそ悲しけれ、我が身一つの秋にはあらねど』と歌ふ也、科學者が科學以外に眞理を認めず、宗教道德の事を以て只管迷信妄想の如く思ふは、宛も詩心なきものが詩人の想像を以て只管空想也となすが如し、偏狹の甚しきもの也、トルストイ伯云く『宗教の事を說くに言辭を以てするは不當也、宜しく涙を以てすべし、若し此涙なくば宗教の事を談ずる勿れ』と、カライル、又ボルテーアを論じて云く『彼の大欠點は彼が深き宗教思想なくして妄りに宗教の事を容喙する事也』と、宗教上の眞理なるものは詩心なきものが詩歌を了解する能はざるが如く、宗教上の實驗なきものが了解し得るものに非ず、然るに經驗論者又は科學者が單

に科學的實驗の見地より宗教を論じ、之を以て迷妄也となすは、已の心の不具なるを知らずして傲然他を呼んで愚俗となすもの也、此の如き人に向ては吾人先づソクラテスの如く『己を知れ』との言を呈せざるを得ざる也、且彼等が經驗を主義とし、實驗を重ずと云ひ、乍ら、宗教的意識の何物なるかを研究せず、漫然之を迷妄也と斷ずるは、是れ自家撞着にして、科學者の精神に反すといふべし、要するに宗教とは人の本領、人の宇宙及び神との關係を論ずるものにして、科學の研究以外に屬す、故に科學の容喙すべきものにも、又科學と衝突すべきものにも非ざる也、或は云く、宗教は到底人智の達し得べからざる事を假定す、故に妄想也、と、然れども科學も宗教も共に假定の上に立てるものに外ならず、例之引力の法と云ふも、進化の法といふも、一の假定に過ぎず、吾人は自然界の現象を研究して此等の諸法則を假定するに非ざれば天地宇宙の事

を了解すること能はず。宗教の假定に至ても亦然り、吾人は人の宗教的意識を研究して神を假定し、靈魂不滅を假定するに非ざれば人の本領を解釋すること能はざる也。何が故に吾人は科學の假定を信ずるを得るも宗教の假定を信ずる能はざるか。

假りに宗教と科學とは相衝突する事ありとするも未だ之に依て直ちに宗教を迷妄也と斷定すべからず。何となれば科學の假定なるものも悉く確實なるものに非ざれば也。例之進化の法は退化の事實を說くと能はず、引力の法も悉く天体の運行を解說すべからず。吾人は今日と雖も科學上の假定なるものが屢々變更せるの事實を見る也。故に吾人は兩者の衝突せる場合に方り、直ちに科學を以て眞理とし、宗教を以て迷妄也と斷定すべからず。但し宗教なるものは科學の眞理に反して成立すべきものに非ざるが故に、科學上の假定にして確立せば之を採用すべきと云ふ迄もなし。

吾人の最後に述べんとするは第三種の科學家は進歩せる宗教家と共に科學と宗教の一致を信ずとの事是也。前既に述べたるが如く宗教と科學とは一時衝突の看ありしかども、爾後敬虔なる學者は根本の眞理に於て兩者の調和を認め、之を調停せんことを試みたり。夫のヒユーミラルの『岩石論』カルドルウードの『宗教と科學の調和』レ、コントの『宗教と理學の關係』、ドラモンドの『二法一元論』の如きは即ち此目的を以て著はされたるもの也、而してロマチスの如きは此科學の宗教に對する思想の變遷を一身に於て代表せるものといふべし。彼はケンブリッチ大學の出身にして、學生の時には頗る宗教に熱心にして一千八百七十三年『祈禱と万有の理法の關係』に關する懸賞論文に於て第一等の賞を得たりしが、後科學の研究に身を委するに及び、宗教に對する信仰冷却し、有

神論に對してさへ疑惑を抱くに至れり。於是彼は千八百七十八年『有神論の公平なる研究』と題せる一書を著し當時彼が有せる思想を發表したりき。然るに彼は其後研鑽の結果遂に舊時の信仰を恢復するに至り『宗教の公平なる研究』と題せる書を著はし前著の誤謬を正したり。是れ實に科學宗教の關係に於ける近代思想の經過を示せるものにして、亦以て今日公平なる學者の宗教に對する態度を見るべき也。去れば科學宗教の衝突と云へるが如きは過去の問題にして、よし枝葉に於ては兩者相衝突せるが如く見ゆる幾多の問題存在するも、其根本に於ては兩者相一致せるが故に之が調和を見るも遠きに非ざるべしとは進歩せる學者の一般に承認する所也。吾人は我國の學者が此等の事實に注目し、百尺竿頭一歩を進めて速に無益なる疑惑心配の中より出でんことを切望に堪えざる也。

智識と宗教（上）

世の學者と稱し、自ら宗教を信せざるもの丶宗教に對する常套の言は是也、云く、『宗教は元來迷信に基くもの也、苟しくも智識あるもの丶信じ得べき所に非ず』と。是れ未だ宗教の何物たるを知らず、徒に先入の癖見に支配せらる丶もの丶言なれば深く咎むるに足らずと雖も、吾人は深く恠む、世の宗教家と稱するものにして又智識と宗教の乖離を信ずるものあるを。彼等は以爲らく宗教は智識に非ず、信仰也、智識は破壞的也、吾人の信念に何の益あるとなしと。斯くて彼等は科學を恐れ、哲學を恐れ、神學を恐れ、而して之を恐る丶の餘り凡ての智識を詛ふ也。彼等は理性的宗教を目しては云く、是れ惡魔の試惑也、危險にして近く可らずと。彼等は又理性的宗教家を目して云はく、彼の中には火なし、彼が信仰は

甚だ冷淡也と。吾人は宗教の智識に非ざるを知る、又敬虔なき智識が信仰を破壞したるの例乏しからざるを知る。徒に理性に走れる宗教が屢々不信仰に陷り、理性を重ずる宗教家が一見熱心を缺くが如き觀あるは吾人の常に目擊する所也。吾人は智識が宗教家の爲に詛はるゝに至りし所以の悉く偶然に非ざるを知る。然れ共智識は果して此の如く詛はるべきものなるか。若し其弊のみを擧げば、宗教を害したるもの豈唯に信仰なき智識のみならんや。否、智識なきの信仰、盲目なる熱心は信仰なき智識にも勝りて宗教を害したり。試に教會歷史を取て之を讀め、吾人の言の必らず誣妄に非ざるを知るべし。

抑も基督教の智識に對する態度如何、吾人は今直に吾人が信仰の憑據にして且摸範たる耶蘇基督に往きて之を學ぶべし。

凡そ人は自ら好める言語を有するもの也。而して其生活及び性質の如

何は其嗜好せる言語に由りてトすべし。抑も基督が最も嗜好し玉ひし言語とは何ぞ。思ふに『眞理』『是也』。試に第四福音書を取て之れを讀め、『眞理』なる言は基督教訓の鍵鑰なりしを發見すべし。云く、『爾曹若し我道に居らば誠に我弟子也、且眞理を知らん。眞理は爾曹に自由を得さすべし』。云く、『我れ眞理を言ふに由りて爾曹我を信ぜず。爾曹の中誰れか我を罪に定むるものあるか。我れ爾曹に眞理を語るに何故我を信ぜざるか』云く、『我は途也、眞理也、生命也』云く、『父必らず別に慰むる者を爾曹に賜ひて究りなく爾曹と共に在らしむべし。此は即ち眞理の靈也』云く、『眞理の靈來らん時爾曹を導きて凡ての眞理を知らしむべし』云く、『爾の眞理を以て彼等を潔め玉へ。爾の言は眞理也』云く、『我れ彼等の爲に自己を潔む。是れ眞理に由て彼等の聖められん爲也』云く、『我は王也、我れ之が爲に生れ、之が爲に世に來れり。蓋眞理に就て證を爲さん爲也。凡て眞理に屬

物は我が聲を聞く』と『眞理』なる言は宛も耶蘇專有の言語なるかの如く、一種の異調を以て彼の脣頭に上れり。抑も基督の所謂眞理とは何ぞ、彼が之に依て哲學的眞理若くは科學的眞理を指したるに非ざるは明也。彼の所謂眞理とは宗教的眞理也、保羅の所謂『秘密たりし神の奥義の智惠』也。然れ共眞理は誤謬に反し、迷信に反す、其智識的の言たるや云ふまでもなし。然らば則ち基督が智識を重じ、智識を以て人類の最も重要にして且尊重すべきものとなしたりしと亦疑ふ可らず。然り、彼は智識的感化を人に與へんことを望み、其威嚴に依りて人を屈服せしめんとするよりも寧ろ眞理に依りて人を敎導せんと努め玉ひたりき。人或は基督の圓滿なる生活を見て其智識的方面を看過すと雖も、彼は決して宗教的三昧に其理性を沒却するが如き熱狂漢には非ざりき。彼がマホメットと異なる點實に爰に在り。彼は實に眞理を愛せり、彼は智識中に活動するに非ずんば自ら滿足するを能はざりき。見よ、彼が聖書に關する智識は如何に博くして且深かりしぞ。見よ、彼が自然に關する智識は如何に高くして且聖かりしぞ。彼は人性を解し玉ひ、又常識に富み玉へり。彼は實に或意味に於て大神學者なりき、大哲學者なりき、大詩人なりき、大理學者なりき、大心理學者なりき、大社會學者なりき、大人類學者なりき、來りて基督に學ぶ者亦誰れか彼が智慧と智識とを驚歎せざるものぞ。

基督の弟子等も亦世人の想像する如く、無學無識にして且智識を輕蔑するものには非ざりき。夫の十二使徒と稱するもの〻多くはガリラヤ湖畔に生息したりし漁夫にして、ラビの教育を受けたるものに非ざりしは疑なしと雖も、彼等は三年の間基督の學校に在りて其智識的生活の感化を受け、少くとも希伯來語若くは希臘語の舊約聖書を讀みて之

を了解し、又希臘語を以て新約聖書を著はすの技量を養ひたりし也。而して彼等の著はしたる新約聖書の文字は後世の稱讃を得るに足り、又舊約聖書の引用も其文字、其精神に於て共に誤謬なかりしとせば、吾人豈容易に彼等を以て無學無識也と斷定するを得んや。且彼等は智識を輕蔑するものには非ざりき。彼得は云く、『德に智識を加へよ』と。雅各は云く、『爾曹の中智くして聰明ものは誰なるや。柔和なる智慧を以て善行を彰はすべし』と。保羅が智識的の人にして智識を重じたりしは亦言ふを要せず。要するに敬虔なき智識の弊害を認むるは彼等に於て之れありき。然れ共之が爲に智識を輕蔑するが如きは決して新約聖書の教訓に非ざる也。

基督が聖靈を以て『眞理の靈』也と云ひ玉ひしは吾人の深く注目すべきと也とす。人或は以爲らく聖靈は權能の靈也と。然り、聖靈は權能の靈也。然れ共權能の靈たる前に先づ眞理の靈たらざる可らず。何となれば眞正の權能は唯眞理よりのみ生ずべければ也。夫の誤謬、迷信なる者も一種の力なきに非ず。宗教の歷史は疑もなく迷信の恐るべきを吾人に示せり。然れ共迷信の力は一時にして永續すべきものに非ず、よし永續するものの也とするも決して人性に幸福を與ふるものに非ず。吾人亦何ぞ此の如きものを要せんや。モズレー嘗て云く、『聖靈なる神は吾人をして正しきことを感ぜしむる神也』と。眞理を語るものが人の同情を得る理由實に爰に在り。然れ共是れ人の同情に非ず、神の同情也。吾人無學なるが爲に人もし吾人に聞かざらんか。是れ人には非ず、神吾人を用る玉はざる也。聖靈の權能の靈たるを知りて、眞理の靈たるを知らざるもの亦以て深く察せざる可らざる也。

然れ共吾人は徒に智識の追求者となるべからず、抑も吾人の所謂智識とは何ぞ、吾人は如何にして之を得べきか、吾人の之に對する態度如何、是れ最も重要なる問題也。

吾人の所謂智識とは素より空理空想の謂に非ざる也。吾人は必ずしも探幽鈎玄の瞑想を排するものに非ず、細密機微動靜を窮め、品題物色論評を致す底の事蓋し亦甚だ貴し。夫の哲學を賤み、科學を惡み、文學を輕ずるは吾人の素より與せざる處也と雖も、こは唯學問の立脚地よりして之を云ふのみ。若し夫れ之を宗教の立脚地より論ぜんか、眞理は最も單純ならざるべからず、智識は最も平易ならざるべからず。徒に空理を求め、空想に走るが如きは素より宗教の事に非ず。ビルレル嘗てコルリッジの空漠たる智識的浮誇を以てチャーレス、ラムの單純なる道德的智識に比して云く、『吾人はラムを要す、コルリッヂを要せず、吾人の求むべきは良き想像に非ずして、良き實行也』と。又云く、『嗚呼グードウイン、ヘイヅリット及びコルリッヂの徒よ、彼等の浮誇なる哲學は今何くに在りや、彼等は宛も瓶中に貯藏せる月光の如し。之を有するも何の益あらんや』と。使徒保羅も亦浮誇なる希臘哲學に就て云はずや、『智者安くにある、學者安くに在る、此世の論者安くに在る、神は此世の智慧をして愚ならしむるに非ずや』と。宗教の眞理を求めんとして空理を追ふもの先づ深く思を此點に致さゞる可らず。

吾人は又重要なる事を知ると、萬事万物を知るとの間に區別あるを知らざる可ざず。宗教の眞理を學ばんとするもの或は以爲らく、我れ必らず悉く神と宇宙とに關する秘奥の理を究めざるべからず、而して後或

は之を信ずるともあらんと。然れ共是れ宛も匕を以て大海の水を測らんとするが如きのみ。吾人何れの時にか悉く宇宙の秘義を究め得べきや。昔時オウガスチン一日沈思默想に疲れ暫く海濱を逍遙したりしが。偶々一童子あり、貝殻に白沙を盛り頻りに之を海中に投ぜり。オウガスチン之を見て試に其何事を爲んとするかを問ひしに、答へて云く、之に依て大海を埋めんとする也と。オウガスチン之を聞き笑て云く、止めよ、止めよ、是れ無益の業也、汝何ぞしかく愚なるやと。爰に於て童子は儼然容を正して云く、然り、我が爲す所は汝の言の如く無益なるべし、然れども汝が限りある智力を以て限りなき神を知らんと欲すると何れぞと言了て其容忽然消失せり。オウガスチンは於是大に悟る所あり、爾來神に對するの信念を起すに至りしといふ。宇宙の眞理は奥妙不可思議にして悉く之を知る可らず。然るに限りある智慧を以て悉く之を究めんとするは貝殻に盛れる白砂を以て大海を埋めんとするが如し。愚も亦極れりといふべし。故に眞に宗教を學ばんとするものは徒に解すべからざる問題を解せんとすることなく、先づ人生の生活に緊要なる重要問題を解釋せんと努むべき也。

吾人の所謂智識とは又唯客觀的眞實の謂のみに非ずして主觀的眞理となりたるものゝ謂也。蓋し眞正の智識は品性の要素を有す。吾人はソクラテス王陽明の流を汲で知行合一の説を主張するものに非ず、然れ共眞正に智識と稱せられ得べきものは必らず品性と爲りたるものならざる可らず。雅各云く、『爾神は唯一なりと信ず、如此信ずるは善し、惡魔も亦信じて戰慄り』と。基督も亦云く、『彼(惡魔)は眞理に居らず、蓋彼の衷に眞理なければ也』と。惡魔は眞理を知ると雖も眞理に居らず、是れ其惡魔たる所以也。吾人に於ても亦然り、吾人の智識若し吾人の品性となる

と能はずんば是れ惡魔の智識のみ、吾人に於て何の益かあらん。基督其弟子等の爲に祈り玉ふて云く『眞理を以て彼等を潔め玉へ』と。智識は吾人を潔むるの力あり、否吾人は智識に由りて潔まるに非ずんば未だ智識あるものといふ可らず、眞正の智者とは物知りの謂に非ずして智識に由りて潔まりたる人也。世の所謂智者と吾人の所謂智者との相違實に爰に存す。

試に耶蘇基督を見よ、彼は唯知るのみに非ず、又常に之と同時に愛し且行へり。彼が發見せる眞理は智識たるに止まると能はずして、又直に愛情と意志のものとなれり。蓋し偉大なる人とは其心意的生活と道德的生活との間に區別なき人の謂也。其權力と其成功との何れの部分が善良なる心情に歸すべく、又其何れの部分が確實なる智力に歸すべきか吾人之を適當に判別すると能はざるものゝ謂也。人之を稱して智者と云はんか、吾人は之を聞て驚くべし。然れ共是れ其智力なきが爲に非ず否其廣大該博なる智識は其圓滿單一なる品性中に融和して又區別すべからざるがため也。或は彼を感情家と云はんか、吾人決して之に首肯すると能はざるべし。然れ共是れ彼が感情の缺乏せるが爲には非ず、彼は世の宗教三昧的熱狂家と異り、其感情高潔純正にして、之を感情家と稱せんにはあまりに沈着平靜なるが故也。彼は强大なる意志を有す、而かも彼が意志は盲目なるものに非ず、執拗なるものに非ず、剛愎なるものに非ず、之を意志の人と稱せんにはあまりに賢く、あまりに細心的にして且あまりに柔和也。換言すれば彼に於ては智情意の三者同時に發達し、同時に働く也。彼が品性は天の使が竿を以て測りしと云ふ聖エルサレムの城の長廣高相等しかりしといふが如く、凡ての點に於て完全なる也。是豈吾人が見る所の耶蘇基督に非ずや。而して豈吾人が所謂眞

正の智者なるものに非ずや。

然らば吾人の所謂智識なるものは唯理解力のみの動作をいふに非ず。至心の動作是也。吾人は此智識をはたらかして以て一方に於ては誤認と迷信とを遠け、他方に於ては敬虔なき智識と實行なき空理とを斥け、以て始めて眞正の宗教を了解し得べき也。徒に智識を輕蔑し、若くは徒に之を過重するものは未だ以て共に宗教を語るに足らざる也。

懷疑

フレデリッキ、ロボルトソンの友嘗て或る晩景に方り、雲に包まれたるスキッドウ山嶺を指し、彼に謂て云く、『余は縱令何物を得るとも夫の山巔の如く余が頭を沒せしむるを好まず』と。ロボルトソン聲に應じて答へて云く、『余は之を欲す、何となれば雲霧やがて消え去りて後、日光は一層の美光を以て山巔を照らすべければ也』と。懷疑は素より吾人の究竟目的に非ず、而かも確信は懷疑の後に來る、吾人安りに之を擯斥すべからず。

之を思想の歷史に徵するに無邪氣なる信仰の後には懷疑の時代來り、懷疑の時代去て更に一新機軸を出せる信仰の時代來るを見る。然り、人智は此の如くして發達し、思想は此の如くして進歩する也。個人思想の歷史も亦之に同じ。疑て信じ、信じて疑ひ、又疑て又信ず、此の如くして吾人の思想は進歩し、吾人の信仰は發達する也。或人云く、『懷疑は確信と云る虹の後面に在る雲也』と。眞理は疑て後始て領解せらるべし。故に曾て疑ひたることなき思想は深からず、曾て惑ふたることなき信仰は其信ずる所をも知らざる也。懷疑の懼るべきを知て、其宗教上必要なるを知らざるものは未だ以て共に信仰を語るに足らざる也。

然れ、共、當今の所謂懷疑と稱するもの、或は自己に一定の識見なきが爲め、甲の說を聞て之に惑ひ、乙の說を聞て之を疑ひ、變化又變化、遂に自ら其信ずる所を知らざるものあり、或は敎權を恐れ、俗論を憚るが爲めに、進んで其信ずる所を研究すること能はず、又退て傳說を守ること能はず、煩悶又煩悶、遂に自ら絕望するものあり。或は更に眞理を研究する精神なく、懷疑の中に在るを以て却て得々自ら誇るものあり、凡そ此等の懷疑は眞理に到達するの道に非ず、又何れの時にか確信を有することを得んや、吾人の冀ふべきものに非ず。

吾人の宗敎上必要也とする懷疑は眞理に忠なるが爲めに起る所のものの也。思想の常に進歩して止まざるが爲めに起る所のものの也。疑はんが爲めに疑ふに非ず、信ぜんが爲めに疑ふ所のものの也。嘗てルテルの有したるもの、嘗てロボルトソンの有したるもの、嘗てスボルジョンの有したるもの、嘗てケーアドの有したるもの也。吾人は此意義に於て自ら懷疑家たらんことを望むもの也。

宗敎の超絕的性質

我國民の宗敎に對する考なるものを見るに、至て淺薄にして皮相に止まるもの多し。夫の俗間の宗敎なるもの〻目的とする處は、家內安全、無病息災、商賣繁昌、子孫長久等此世の福利を祈念するに非ざれば地獄の刑罰を遁れ、極樂の幸福を求むるに外ならず。是れより一歩進みたるもの〻考なるものも、亦宗敎を以て、忠孝節義を進め、若しくは社會改良の方便となすに過ぎざる也。元來我國民の弱點は其あまりに實利的なるに在り。故に彼等は何事を論ずるにも、實利の點よりする也。國利民福は實に我國民の金科玉條にして、學問の研究も我が國に在ては、眞理の爲

めに非ずして、寧ろ國利民福を增進する爲めなる也、去れば宗教なるものも我が國民の眼より之を見れば畢竟國利民福を增進する方便たるに過ぎず、試に宗教上の集會に於て聽衆の最も喜ぶ所の問題を見るに、多くは現世の問題に關するものにして、直接宗教に關するものには非ず、曾て基督教の味方が基督教を辯護し、之を我國民に紹介したりしは、其社會改良の方便として最良也との事なりき、此の如くして『社會改良と基督教』抔云へる著書は世に出でたりき、基督教の敵が基督教を攻擊し、之を國外に放逐せんとしたりしは、其我國の國体と相容れずとの事なりき、此の如くして『教育と宗教の衝突』等の著書は世に出でたりき、宗教家の方面に在ても亦宗教を一の方便視し、眞正の尊王愛國は獨り基督教に依りて達し得らるべしと云ひ、國家を救ひ、社會を改良するは基督教の專賣特許權也抔云ひて、基督教辯護の任に當りしは、一は時勢の然らしめし所也とは云へ、宗教家としては甚だ幼稚なる思想なりしといふべし、

素より宗教は國家にも社會にも關係なきものには非らず、一個人の身を修むるためにも、社會を改良するためにも、忠孝節義を進むる爲めにも、國利民福を增進する爲めにも、大なる力のあるものにして、此等の事は實際宗教の力に依らざれば功を奏し難きもの也、然れ共宗教が此の如き影響を社會に及ぼすは全く間接の結果にして直接の働には非ず、若し一身を修め忠孝節義を進め、社會を改良し、國利を謀らんが爲めに宗教を信ずと云はゞ、是れ既に宗教に非ずして宗教を以て一箇の方便となし、器械となす也、而して其結果は宗教の特色を排除し、宗教の感化を皆無に歸せしむるに至るべし、吾人は素より政治の上にも、教育の上にも、社交の上にも、實業の上にも、家庭の上にも、宗教の精神を皷吹して

之を神聖にし、之を宗教化せしめざる可らず、基督が吾人に祈禱の模範として教へ玉へる『爾國を來らせ玉へ、聖旨の天になる如く、地にもなさせ玉へ』と云へるは即ち此意を云へるものにして、基督教は決して社會を度外視し、國家を度外視し、家族を度外視するものに非ず、然れ共宗教の社會に及ぼす感化なるものは抑も末にして、其本には非ず、其本を棄てゝ其末を得んとす、是れ本末を顚倒するものにして、唯に其末を得ざるのみならず、亦其本をも害するに至るべし、顧みざる可らず。

然らば即ち宗教の宗教たる點如何、余の所謂超絕的性質と稱するもの即ち是れ也、超絕的性質とは、時間、空間に超絕するの謂也、抑も宗教とは絕對無限の眞理に對する吾人の信念にして、吾人が此絕對の眞理と致一し調和するに至るは是宗教の要也、夫れ此世界は變化極りなき無常の世界也、此無常の世界に生れて永遠の生命に入るは、是れ時間、空間に超絕せるにて、宗教の宗教たる點實に此處に存す、此現世は果かなき浮世にして吾人の生涯は蜉蝣の如きもの也、此の浮世に在りて、而かも心は此見るべき世界を脫し、見る可らざる世界に生るゝは、是れ所謂超絕的にして、宗教の宗教たる點實に此處に在り、『よきサマリヤ人』は平生敵視したる猶太人の、盜賊に逢ひて死に瀕せるを見て之を助けたり、彼は國家、人種等の觀念を超絕して、人類の爲すべき務をなしたる也、宗教の宗教たる點實に此處に存す、要するに宗教の眼中には過去、現在、未來の差別なく、又國家、人種等の觀念なし、是等のものに超絕して、絕對無限の眞理を信じ、其眞理を愛し、其眞理と同化す、是れぞ即ち宗教の宗教たる所以にして、其社會に及ぼし、國家に及ぼす感化の如きは、此信念の結果たるに過ぎず。

更に之を論ずれば、宗教なるものは、或る國家に關係し、或る人に關係し

或る場合に關係するものに非ず。時間空間を超越して、如何なる時代、如何なる國家、如何なる人、如何なる場合にも適應すべき主義、精神を與ふるもの也。使徒路加が傳へたる一話は最もよく此理を明にせるもの也。或人基督の許に來りて、我兄弟に遺産を我れに分てよと命じ玉へと請ひげる時、彼れ答へて云く、『人よ、誰が我を立てゝ爾曹の裁判人、又物を分つものとなせしぞ』と。彼は之に干渉することをせざりき。其理由他なし、此の如き特別なる場合に干渉するは彼の職分に非ざれば也。然れ共彼は之を機として最も大切なる眞理、永遠の主義なるものを與へたり。云く、『戒心して貪心を慎よ、夫れ人の生命は所有の饒なるには由らざる也』と。彼は直接に兄弟の爭論に干渉せざりき。然れ共彼は其爭論の原因に溯りて之を醫すの主義を與へたり。基督はパリサイの徒の如くに尊王愛國を口にせざりき。然れ共彼はパリサイの徒がカイザルに稅を納むるは宜きや否やと問ひし時、『カイザルのものはカイザルに歸し、神のものは神に歸すべし』と答へて、政府に盡すの精神を與へたり。基督が『我よりも父母を愛しむものは我に協はざる者也、我よりも子女を愛しむ者は我に協はざるもの也』と云ひしが如きは、實に大膽なる言にして、基督教の反對家が取りて以て攻擊の武器となす處也と雖も、是れ即ち基督教の超絶的性質にして、其信念ありてこそ初て宗教の宗教たる所以存在せりと云ふべけれ。而して基督教が世界萬國の宗教たり、天下萬世の宗教たる所以の理由も亦實に此處に存する也。

夫れ今日我國民の患とする所は、何事も商賣主義、現金主義、實利主義なるに在り。而して世の中には宗教をも此主義に變せんとし、宗教家の中にさへ斯くなさんとするものあり、思はざるの甚しき也。此超絶的性質の爲めに或は俗人に了解せられず、同情を得難きこともあらん。而かも基

督教は之れが爲めに其性質を變化せしむべきに非ず。吾人は宗教家たるものが、俗論を恐るゝことなく、最も大膽に此性質を發揮せんことを希望して止まず。

信神の最大動機

亞剌比亞のウヅに約百と云へる義人あり。其人となり完全にして正しく、神を畏れ惡に遠かる。彼又いと富めるものにして羊七千、駱駝三千、牛五百耦、牝驢馬五百を有し、奴僕も亦夥しくありき。富の在る處は權力の在る處也。故に彼は又鄕黨隣里の尊敬を受け、『東の人の中にて最も大なる者』と稱せられたりき。而して彼には又男子七人女子三人あり。兄弟いと睦しく彼の周圍に集りて團欒の樂を極めたりき。要するに彼は幸運の寵兒にして、未だ世に悲哀、苦痛なるものあるを知らざりき。於是約百を疑ふもの以えらく、約百の神を畏るゝもの豈故なしとせんや、唯求むる處あるが爲めのみ。神は彼と其家及び其一切の所有物の周圍に藩屏を設け彼が手に爲す處を嘉く成就せしむ。是れ彼が神を畏れ惡に遠かる所以也。神若し其手を伸べて彼の一切の所有物を擊たんか、彼れ必ず神に背き神を詛はんと。(約百記一の九―十一)

當時イスラエル國民は謂えらく、凡そ疾病、災禍、艱難、悲哀は神の惡人を罰し玉ふ所以にして、家內安全、無病息災、商賣繁昌、子孫長久は神が善人に報ひ玉ふ所以也と、斯の如くして彼等は災禍を遁れ幸福を得んが爲めに神を信じたり。幸福は彼等が信神の目的にして、信神は私慾を滿足せしめんための手段に過ぎざりし也。約百記の著者は斯る不健全なる思想を其當時の國民に發見したり。故に彼は義人約百を畫き出し、彼の神を畏れ惡に遠かりたる所以のものは求むる所ありしが爲めに非ず、

故に其所有物を悉く失ひ、其愛する子女を悉く取られ剩へ其身堪へ難き苦痛に逢ふも尙神を讃美して罪を犯さゞりし事を述べて、其國民と世界とに向て商賣主義、現金主義なるものを排し、更に高尙なる信念の動機を與へたりし也。

フラウド云く、『善と幸福とは異名同物也と云へるは眞實ならず、曾て此地球を踏みし最も完全なる人は悲哀の人と呼ばれ玉へり』と。古來最も世に誤られたることは、善と幸福との混同したること也。人生の最大目的を以て幸福を得るに在りしと爲したること也。人に快樂と幸福とを與ふるものは善にして、人に最大快樂と最大幸福とを與ふるものは最善なるもの也とは、スペンサー一流の哲學家を唱道する所にして、神の目的は人類を幸福ならしむるに在りとはペーレーの曾て主張せる處也。而して此思想は又宗敎の中に入り來れり。人生の目的は幸福を得るに在り而して宗敎は幸福を與ふるもの也とは、吾人が屢々宗敎家の口より聞ける處也此の如き思想にしてもし其極端に走らば、古の猶太人の如く又今日我國の俗間に行はるゝ宗敎の如く、信神は唯私慾を滿足せしめん爲めの手段となるに至るべし。是れ豈健全なる思想ならんや。

古來世に出でたる最も完全なる人は即ち耶蘇基督也。而して彼が享けたる月桂冠なるものは幸福には非ざりき。『狐は穴あり、空の鳥は巢あり、されど人の子は枕する所なし』とは、彼が此世に於ける生活の狀態を寫せるものなりき、而して彼の受けたるものは荊棘の冠と十字架なりき。若し人生の目的にして幸福を得るに在りとせば、基督は人生の目的を達せずして死したりと云はざる可らず。若し神の目的にして人類を幸福ならしむるに在りとせば、神は基督に於て其目的を達せざりしと云はざる可らず。若し宗敎の目的は人に幸福を與ふるに在りとせば基督

の宗教は先づ自己に於て失敗したりしと云はざる可らず。寧ろ此理あらんや。

蓋し宗教の關する所は身体に非ず、精神也、人性の情慾を滿足せしめ、物質的の快樂を與ふるは其目的に非ず。然らば則ち宗教の目的如何云く生命を附與する是れ也、而して吾人信神の動機實に此に在り、

試に第四福音書を取て之を讀め、記者の最も愛したる言は生命、永生に非ずや、云く、『モーセ野に蛇を擧げし如く人の子も擧げらるべし、凡て之を信ずるものに亡ぶることなくして、永生を受けしめんが爲め也』(三の十五)、云く、『夫れ神は其生み玉へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し玉へり、此は凡て彼を信ずる者に亡ぶることなくして、永生を受けしめんが爲め也』(三の十六)、云く、『我が與ふる水は其中にて泉となり、湧出でゝ永生に至るべし』(四の十四)、云く、『我言を聞き我を遣はしゝものを信ずるものは

永生をもつ』(五の廿四)、云く、『我は途也、眞也、生命也』(十四の七)、云く、『永生とは唯獨りの眞神なる爾と其遣はしゝイエス、キリストを知る是也』(十七の三)、他の福音書中亦此言に乏しからず。云く、『もし人全世界を得ると も其生命を失はゝ何の益あらんや、又人何を以て其生命にかへんや』(馬太十六の廿六)、云く、『人の子の來るも人を役ふ爲めに非ず、反て人に役はれ、又多くの人に代はり、生命を與へ其贖とならん爲也』(廿の廿八)と、以て宗教の目的は幸福に非ずして生命に在るを知るべき也。然らば則ち生命とは何ぞ。云く、神を知り、基督を知り之と一致し、之と同化する是也。神の生命を以て之を我が生命となし、已れ自ら神人となる是也。之れが爲めには幸福をも犧牲にすべし、己の生命をも棄つべし。幸福にして得べくんは得べし、得可らずんば棄つべし。善にも惡にも禍にも、時を得るにも時を得ざるにも善を爲すべし、義を行ふべし。是れ即ち生命也。

是れ即ち宗教也。

吾人は又此世に在れ、來世に在れ、應報を望むが爲めに善をなすは至善に非ずとのことを知らざる可らず。家内安全、無病息災、商賣繁昌、子孫長久を祈るが爲に神を信ずるの陋なるは云ふまでもなし、地獄の刑罰を恐れ、天國の幸福を望むが爲めに神を信ずるの陋なるも亦之に讓らず。吾人の善となすは其善なるが爲めも也。故に善をなすがために災禍に逢ふことあるも尚之をなさゞる可らず。吾人の神を信ずるは信すべきがために也。故に神を信ずるがために難に逢ふとあるも尚之を信せざる可らず。財寶、權威、名譽、福利を得んが爲めに善をなさんか、善は手段に過ぎず。故に至善に非ず。應報を求むる施捨は至德に非ず。正直は最良の政策也と雖も、政策のために正直なるは眞の正直に非ず。此の如く天國に生れ地獄に墮ちざらんがために神を信ずるは眞正の信神には非ざる也。

世に生命保險會社なる者あり、一定の掛金をなすときは何時死するとも、定額の保險金を得べし。夫の教會に出席し、僅少の施捨金をなすときは、死して天國に至るを得べしと思惟するものゝ如きは、宗教を以て生命保險會社と同一視するもの也。陋も亦甚しといふべし。

祈禱

和蘭國ライデン大學の教授テーレ其有名なる著書『宗教學』に於て祈禱を論じて云く、『祈禱は宗教に於て最も大切なる要素にして、祈禱なくんば宗教もなし』と。英國の說教家フレデリック、ロボルトソンも亦嘗て云へり、『祈禱と神聖とは同一也、宗教心ある人と祈禱する人とは同一也』と。去れば祈禱と宗教とは一にして二に非ず。基督教が之を最も重要視するは宜也といふべし。マシユー、ヘンリー嘗て云く、『汝もし呼吸せずして

生活する人を見出し得べくんば祈禱なくして生くるクリスチャンを見出し得べし』と。祈禱は即ち基督教徒の呼吸にして、之ありて初めて其靈的生命を保つことを得る也。

或は以えらく、人既に德を修め道を行ふ、又何ぞ神に祈るを要せん、菅公も『心だに誠の道に適ひなば祈らずとても神や守らん』と云はずやと、此言一理あるが如しと雖も畢竟皮相の見たるを免れず。何となれば人もし其心誠にして行ふ所能く道に適はゞ是れ基督の所謂『父我に在り、我父に居る』の境に達したるものにして、假令口に祈らずとも心は祈に滿つるもの也。然れども天下の實際に於て何人か果してよく此妙境に達したる者ぞ。基督は其心天に通ず、亦祈るべきものなきが如し、而かも彼は常に人なき處に退きて祈れりといふ。何人か祈禱なくして能く德を修め道を行ひ得る者ぞ。

或は云く、吾人如何にして祈禱に依りて既に定まれる自然の法則を變化し、神の聖意を動かし得べきぞと。是れ祈禱の眞意を誤解せるもの〻言而已。何となれば吾人は祈禱に依りて自然の法則を變化せんとを求むるものに非ず、又何ぞ之に依て神の聖意を定めんと企てんや。自然の法則は嚴として犯すべからず、神は吾人よりも賢し。人もし妄りに自己の慾望に從て天地の大法を變じ、神の聖意を定めんとせば是れ自己を以て神より優れりとなすものにして、不敬虔の甚しきもの也。然れ共吾人は亦自然法なるものは旨目に非ずして高尚なる目的なり、人類の幸福の爲に働くものの也との事を確信するもの也。自然の法則は素より犯すべからずと雖も之を統御するものは慈愛ある神也。故に宗教の方面より之を見れば凡ての勢力と法則とは畢竟神の恩寵の使者たるに過ぎず、神は其聖旨に從ひ人の幸福の爲に自由に之を用ゐる玉ふ也。吾人

の祈る處のものは此恩寵のみ亦何ぞ安りに自己の慾望を遂ぐるとを求めんや。

蓋し祈禱に三個の意義あり、請ふ試に之を論ぜん。思ふに祈禱は人生自然の叫也。吾人の天地間に生息するや一種の勢力ありて吾人を壓迫するものあるを覺ゆべし。所謂疾病災厄不幸失敗窮乏困難死亡なるものは常に吾人を嚇す所の勢力にして、吾人の靈魂は常に叫びて此勢力より遁れんと願ふ也。是れ豈祈禱に非ずや。又吾人の此世に在るや同情を要するものにして、一日も同情なくんば生息すると能はず。然れ共吾人は朋友の同情を以て滿足すると能はざるとあり、最も愛する妻子の同情さへ尚吾人を滿足せしむる能はざるとあり。否世は悉く我に背き、我が親友也と思ひしものも皆我に背きて踵をかへすが如きと甚少からず。此時に方り吾人は果して何處に往きてか同情を求めん是れ神に非ずや。去れば吾人が窮乏困難に際し天に向て叫ぶは人生自然の要求より出づるものにして亦誰れか其用と不用とを論せんや。

然れども祈禱とは吾人が世に向け居りし顔を取りて之を神に向け、神の顔を見、神と語る事也。吾人もし紅塵萬丈の市街に住し、偶々出でゝ郊外山高く水清き邊に散策せば俗氣忽ち消散し、氣宇晴朗、超然として別世界に入り、別人間となりしが如く感ずべし。祈禱なる者も其趣頗る之に似たり。吾人もし日夜紛々たる俗事に鞅掌し、唯世俗の事に忙殺せらるべくんば、吾人の思想感情は悉く俗氣に滿ち俗臭に染まるべし。然るに若し此瞬間に方り靈眼を開きて神の靈容を仰ぎ、其靈氣に接せば俗氣俗臭頓に消磨して宛も陰雲朦々の後に皎々たる明月を仰ぐが如き感を生ずべし。見よ、モーセ、シナイ山に上り四十日四十夜神と言ひしが其山より下るや其面より光を放ちたりきといひ、又耶蘇が高き山に上

りて祈り玉ひしとき其容貌變り其面日の如く輝きたりしといふに非ずや、所謂神々しき精神と面とは唯祈禱に依りてのみ得べし、祈禱豈忽にすべけんや、

然れども祈禱の最も大切なる要は吾人の思想、願望及び決斷を全く神に默從せしむるに在り、吾人は既に祈禱は吾人の祈願に依りて神の意志を定むるものに非ずとの事を述べたり、豈啻に之れのみならんや、祈禱は吾人の祈願を神の聖意に從はしむる也、神の聖意を動かすに非ず、吾人の心を動かす也、神をして吾人の爲さんとする所を爲さしめんとするに非ず、吾人をして神の爲さんとする所を爲さしむる也、神を天より引き下すに非ず、吾人を天に引き上ぐる也、一言にして之を云へば天意を學んで天意に從ふ也、耶蘇がゲッセマヲ園中に祈れる祈禱は吾人の絶好摸範也、彼先づ祈りて云『我父よ若し肯はゞ此杯を我より離ち玉へ』と、彼も人也、眼前に横はれる十字架の苦痛を見ては斷腸の念に堪えざりし也、彼が此の如く祈れるものは實に彼が自然の叫なりし也、然れども彼は神の靈容を仰ぎて神と語れり、彼の面は漸くにして輝けり、故に更に祈りて云く、『去れど我心のまゝを爲さんとするに非ず』と、而して彼は遂に天意を學んで天意に從ふの決心に達せり、故に最後に祈りて云く、『聖旨に任せ玉へ』と、是れ豈祈禱の眞義に達せるものに非ずや、使徒保羅も亦之と均しき經驗を有せり、彼自ら語りて云く、『一の刺を我が肉体に與ふ、即ち我が傲ぶるとなからん爲に我を擊つサタンの使者也、我れ之が爲に三次主に之を我より去らんとを求めたり、我に言ひ玉ひけるは我が恩爾に足れり、蓋我が力は弱に於て全くなれば也、此故に寧ろ喜びて自らの弱に誇らん、是基督の力我に宿らん爲也』と、吾人の情願を抑制し、吾人の慾望を變化して靜に天命に服從するとを學ば

ざる祈禱は眞正の祈禱に非ず、眞正の祈禱とは即ち吾人自己の慾望を悉く忘れて之を神の聖意の中に埋沒せしめ得るもの也。願くは吾人をして此妙境に達し得るまで祈らしめよ、是れ即ち眞の祈禱たる也。

宗教の實際的要義

使徒保羅羅馬に在る教會に書を贈て云く、『神の國は飲食に非ず、唯義と和と聖靈に依れる歡喜に在り』と。神の國とは宗教と云ふが如し。故に神の國とは何ぞやとの問題を定むるは、宗教とは何ぞやとの問題を定むる也、

之を消極的に論ずれば、宗教は飲食に非ざる也、保羅の之を云へるもの、蓋し當時飲食に關し彼等の間に爭論ありたれば也。故に云く、『或人は凡てのものを食ふべしと信じ、或人は弱くして野菜を食へり』と。肉を食ひ野菜を食す、是れ一家の些事のみ、亦何ぞ宗教に關せん。然るに彼等之に依て自ら律し、而して又他を律せんとす。是れ尚可也。他の之れに從はざるを見るや大聲疾呼忽ち呼ぶに罪人を以てす。思はざるの甚しき也。故に保羅彼等を戒めて云く、『爾何ぞ其兄弟を罪するや、何ぞ其兄弟を輕ずるや、我儕は皆基督の臺前に立つべき者也』と。又云く、『我儕各々己の事を神に訟ふべし、去らば我儕互に罪を定むること勿れ、寧ろ兄弟の前につまづくもの、或は妨ぐるものを置かざらんことを定むべし』と。何ぞ獨り飲食と云はん、凡そ何の事に關せず、人と爭ひ人を議し、人を罪するは宗教の本義に非ざる也。

宗教の本義とは何ぞ、一言にして之を云へば道德的品性是也。試に基督の宗教なるものを見よ、何人か先づ其倫理的、道德的なるを認めざるものあらんや、吾人は素より彼の宗教を以て倫理也と云はず、而かも彼の

宗教は倫理的にして哲學的に非ず、又教理の系統にも非ず、信仰箇條にも非ざる也。是豈必ずしもワツトソン、ハーナックを待て後知らんや。公平に福音書を讀む者は何人も看過し能はざる事實也。

保羅の書翰を讀む者は何人も彼が先づ其初めに於て宗教上の教理を明にし、而して後倫理的教訓を與ふるものあるを發見すべし。保羅の倫理は世の倫理教の如く基礎なきものに非ず。彼は宗教の上に倫理を建てたり。而して彼の宗教は又倫理なき宗教に非ず。彼の宗教は必らず之に伴なふに倫理を以てせり。彼の所謂神の國の實際に於ける顯現は吾人日常の道德是也。故に云く、『神の國は義と和と聖靈に依れる歡喜に在り』と。是れ宗教とは道德的品性に在りといふが如し。之を外にして徒に外部の形式に拘泥し、若しくは信條の相違に依り妄りに自尊排他の風を增長するが如きは未だ以て宗教を知らざるものと謂ふべし。

抑も保羅の示せる道德的品性とは何ぞ。吾人請ふ左に之を略說せん。先づ第一は義也。保羅は此文字に特殊の意義を附して之を羅馬書に用ゐたり。神、人類の罪を赦して之を義となし玉ふとの事是也。然れ共保羅の爰に所謂義とは神人の關係を指せるに非ずして人と人との關係を指せる也。換言すれば宗教の第一義は道德上正義を守るに在りと云ふが如し。

世人或は謂えらく、宗教は感情の作用也と。人をして此の如く思惟せしむるに至りしもの、宗教の信者たるもの稍もすれば感情に流れ易く、其極遂に正義の念を失ふに至るものあるに由らずんばあらず古來今日に至るまで教會歷史は歷々として之が證明をなせり、夫の迫害は何が爲めに起れる。夫の異端征伐は何が爲めに起れる。是れ豈熱心の餘り健全なる判斷力を失へるが爲に非ずや。熱心は宗教上素より欠く可らず

熱心なき宗教は死せる宗教也。而かも熱心のみにして判斷力を欠ける宗教は病的也。健全なる基督教徒とは熱情と共に冷なる頭腦を有するものゝ謂也。熱情禁ずる能はざるが爲めに他を害して顧みざるが如きは素より眞に基督教を解せるものと云ふ可らず。

吾人が基督に於て斷えて其欠點を見出すと能はざる所以のものは實に彼が燃ゆる熱心に加ふるに、冷靜なる判斷力を以てせるが爲め也。見よ、彼が敵の手に捕へられんとするや、熱情漢彼得は劒を拔きて祭司の長の僕を擊ち、其耳を削ぎ落せり。然るに彼れ從容として彼得に謂て云く、「爾の劒を故處に納めよ、凡て劒を取る者は劒にて亡ぶべし」と。何ぞ夫れ冷靜なるや。彼れ又祭司の長の庭に在り、其下吏彼を撲つや、彼れ單に抗議して云く、若し『我が語りしと善からずば其善からざるを證せよ、若しよくば何ぞ我を撲つや』と。何ぞ夫れ沈着なるや。彼の自ら持し、人に對するや此の如く沈着、冷靜にして正義に從ひ秋毫も人を害するなし、是れ豈宗教の第一要義に非ずや。

次には和也。和とは神人間の平和に非ずして、人と人との間の親和也。宗教信者を結合するものは愛也。愛に依て結合するものは最もよく親和せざる可らず。然るに事の實際に於ては宗教信者程互に不和なるものあらず、彼等は儀式の異なるが爲めに相爭ひ、信條の異なるが爲めに相戰ふ也。否唯に是れのみならず、彼等は更に些細なる事に就て忿爭し、其甚しきに至ては或は私情の爲めに、或は嫉妬の爲めに互に讒害、誹謗を逞ふする也。是れ豈全く宗教の本義に背く者に非ずや。保羅云く、『人々のよしとする處を心にとめて之をなし、爲し得べき處は力を盡して人々と睦み親むべし』と。基督云く、『爾もし禮物を携へて壇に往く時、彼處にて兄弟に恨まるゝことあるを憶ひ出さば、其禮物を壇の前に置き、先づ

任きて爾の兄弟と和らぎ、後來りて爾の禮物を献げよ』と。親睦、和協の在る處は神の國也。徒に人と爭ひ、平地に風波を起すが如きことを好む者は、其人假令熱心也と雖も眞に宗敎を知らざるものと謂ふべし。聖靈に依れる歡喜は眞正なる宗敎の他の要素也。聖靈に依れる歡喜とは聖靈のインスピレションを受けたる喜悅の謂にして、換言すれば聖化せられたる喜悅也。人或は謂えらく、基督敎徒たるものは常に嚴格にして眞面目ならざる可らずと。又謂えらく、宗敎とは常に罪を悲しみ罪に泣くの謂也と。然れ共是れ單に一面のみ。若し他面を云はんか、宗敎の最大要義は悲しむに非ずして喜ぶに在り、泣くに非ずして笑ふに在り。嚴格なるに非ずして寛容なるに在り。偏固なるに非ずして悠揚なるに在り。見よ、保羅は如何に屢々吾人に喜ぶべきことを勸めしぞや。彼れ即ち云く、『爾曹主に在て喜べ。我れ又言ふ、爾曹喜ぶべし』と。徒に澁面を造り苦言を吐きて得々たるもの何ぞ眞の宗敎を知らんや。吾人は以上の三者を以て宗敎の定義を盡せりと云はず、而かも是れ豈最もよく宗敎の本義を明にせるものに非ずや。

先づ神を愛せよ

基督云へるあり、云く、『爾もし禮物を携へて、壇に往きたる時、彼處にて兄弟に恨まるゝことあるを憶起さば、其禮物を壇の前に留め置き、先づ往きて爾の兄弟と和ぎ、後來りて爾の禮物を献げよ』と。使徒約翰も亦云く、『もし我は神を愛すと云ひて、其兄弟を憎むものは是れ誑者也、既に見る所の兄弟を愛せずして、未だ見ざる神を何で愛せんや、神を愛する者は亦其兄弟をも愛すべし』と。是れ先づ人を愛すべし、去らば神を愛するを得べしといふが如し。然れ共吾人先づ神を愛せずして、如何で

兄弟を愛するを得んや。見よ、世の神を知らざるもの、兄弟の兄弟たるを知らざる也。此を以て彼等互に怨み、互に憎み、互に嫉み、互に爭ひ、互に殺す也。假令彼等互に兄弟たりとの事を知るも、彼等は互に相和らぎ、相愛するの道を知らず。欵然相親しめる者も一旦利害の相分るゝものあるに逢へば、忽ち反目嫉視、甚しきは牙を鳴して呑噬せんとする也。神を愛するを知らざるもの亦何ぞ兄弟を愛するを知らんや。

吾人若し神に歸らんか、神は吾人を愛する天父也。吾人は相互に父を共にする兄弟也。吾人の所謂兄弟とは空言、虛辭に非ざる也。吾人は於是唯に天父が吾人に命じて、『爾曹互に相愛すべし』と云ひ給へるが故に、相愛するに非ず。天父を愛するの熱情は溢れて、天父の愛子たる吾人の兄弟を愛する也。去らば吾人先づ神に歸り來らんかな。天父の愛を味はゝんかな。此の如くして吾人は始めて兄弟を愛するを得べき也。

故に之を先後より論ずれば、神を愛するは先也。人を愛するは後也。神を愛するを知りて初めて人を愛するを知るべし。人を愛するを知りて後神を愛するを知るに非ざる也。

基督の言と、約翰の言とは共に行爲の結果に就て之を云へるのみ。神を愛するに先ちて人を愛すべしとの意に非ざる也。神を愛すと云ふもの、必らず兄弟を愛せざる可らず、神に禮物を献ぐるもの必らず兄弟と和がざる可らず。何となれば神を愛すと云ひて、兄弟を憎み、神に禮物を献げて兄弟を恨まば、其宗教なるものは徒に虛禮虛儀に終る可ければ也。換言すれば神を愛すゝは因にして、兄弟と和ぐは果也。因なくんば果を見る可らず。然れ共果は以て因を推すべし。兄弟を愛するの愛なくして、何ぞ神を愛するの愛ありと云ふことを得んや。

宗教と道德との關係是に於てか明也。宗教は因也、道德は果也。宗教なく

んば眞の道德なく、道德なくんば眞の宗教なし。二者其一を過重して、他を忘る、共に道德を知り、宗教を知るものと云ふ可らず。

其本に復れ

均しく是れ颯々たる秋風也、強健なるものは心身爲めに爽快を覺えたりとせん。虚弱なるものは一夜爲めに寒冒に犯されたりとせん。秋風の實に非ず、健康の狀態之をして然らしむる也。均しく是れ滋養の飲食也、健胃なるものは身体爲めに強健を增したりとせん。胃弱なるものは疾病爲めに生じたりとせん。飲食の罪に非ず、身体の強弱之をして然らしむる也。身体此に強健なる時、風雨も恐るゝに足らず、寒暑も厭ふに足らず、腐敗せる食物さへ尙時によく消化して綽々たる餘裕あるべし。先づ有すべきものは強健なる身体なるかな。

之を心の上に就て論ずるも亦然り、心神に在る時我等は到る處に潔く、到る處に勝利を得べき也。

使徒保羅云く、『潔人には凡ての物潔く、汚れたる人と不信者には一として潔きものなし、既に彼等の心と良心共に汚れたり』と。潔きと汚れたるとは人に在りて物に非ず、心に在りて形に非ず。心神に在る時、萬物悉く潔し、亦何ぞ汚れたりといふものあらん。

吾人は素より今日の戀愛文學と稱するものを世に推薦するものに非ず。然れ共もし此等の文學に依りて淫靡の情を起しつゝありといふものあらば、是れ心既に汚れたる也。吾人は必ずしも裸体畫を奬勵せんとするものに非ず。然れ共之に依りて卑陋の情を催しつゝありといふものならば、是れ心既に汚れたる也。是等の人は假令戀愛文學なきも、裸体畫なきも早晩墮落するを免れざるべき也。

人は云ふ、世は汚れ、社會は腐敗せりと、吾人は決して之を否むものに非ず。然れ共之れが爲めに自ら其渦中に陷るは、是れ心先づ腐敗せるが爲めにして世と社會とを責む可らず。語に云く、物先づ腐れて蟲之に生ずと。

心神に在る時、我等は潔く、我等は強し。假令卑猥なる文學を讀み、淫靡なる見世物を見、野卑なる音樂を聞くことありとするも、清興の自ら胸に湧き來るものあるを覺ゆべきのみ。

心神に在る時、我等は潔く、我等は強し。假令黃金前に横はり、權力後に待つの誘惑ありとするも、我等は唯之に勝ち得て餘あるを覺ゆべきのみ。

心神に在る時、我等は潔く、我等は強し。『或は死、或は生、或は天使或は執政、或は有能、或は今ある者、或は後あらん者、或は高き、或は深き、又他の受造物』何物も我等を汚し、我等を惑はすこと能はざる也。

心神に在る時、我等は潔く、我等は強し、野に往くも、山に往くも、俗に入るも、聖に入るも、我等の到る所悉く潔し、亦何處にか腐敗あらんや。

心潔からずして先づ物の潔からんを望み、己れ強からずして先づ他の強からんを願ふは本末を誤れるもの也。希くば先づ我等をして心神に在るの生活を得せしめよ、去らば我等の生活は潔く、我等の生活は安からん。嗚呼先づ有すべきものは潔くして強き心なるかな。

神の王國（上）

イスラエルの詩人歌ふて云く、

我れ爾の指のわざなる天を觀、爾の設け玉へる月と星とを見るに、世の人は如何なるものなれば、之を聖念にとめ玉ふや、人の子は如何なるものなれば之を顧み玉ふや、只少しく人を神よりも卑くつくりて、

榮と尊貴とをかぶらせ、又之に手のわざを治めしめ、万物を其足下におき玉へり、(詩篇八の三―六)

是れ豈人類の相反せる二方面を詩的に言表したるものに非ずや、即ち一面に於ては人類を神及び其造り玉へる宇宙の宏大無邊なるに比して、其微弱にして助なきを顯はし、他面に在ては人類を萬物に比して其高尚にして權威を有し、且神に近邇せるものあるを顯はせり、雲收て靈廓、點塵なきの夜仰て天象を見、斗牛の碎玉を舖き、河漢の明珠を燦たらしむるを望むもの、亦誰れか蜉蝣を天地に寄す、渺たる滄海の一粟たるを感せざるものあらんや、然れども是れ唯一面のみ、人の人たる所以のものは其五尺の體軀の故に非ず、其脆弱なる感情の故に非ず、永遠無朽の靈魂を具へ、靈妙不可思議の智能を有し、或は思を天地に馳せ、或は心を千古に致し、或は風を御し、或は雲を使ひ、或は山を夷げ、或は海を埋め此の如くして萬物を統御するに依らずんばあらず。『唯少しく人を神よりも卑く造りて榮と尊貴とをかぶらせ、又之に手のわざを治めしめ萬物を其足下に置き玉へり』と云ふもの、人類の此他面を顯はしたるものに非ざるはなし。

蓋し人類の此思想を有するは其自重を示す所以にして、又理想の生ずる所以也。而して此思想は古今萬國何れの國民も之を有せざるはなし。進歩の法則より之を考ふれば人類社會の發端なるものは幼稚にして且野蠻なりしと疑ふ可らず。然るに古來何れの國民も太古の人類は黄金世界を樂みたりしとの傳説を有せざるはなし。試に世界最古の文學たる創世記を取て之を讀め、吾人は所謂人生の樂園なるイデンの記事を見るべし。古風の神學者は以爲らくアダム、イブなる人類の始祖が住居したりしイデンは完全なる樂園なりしが、彼等の一度罪を犯し樂園

を放逐せられしより、人類は遂に今日の悲境に墮落したりし也と。然れ共吾人の先祖が住したりし實際のイデンは寧ろ幼稚朦昧なる世界にして、決して完全なる世界には非ざりし也。若し之を完全なる世界なりしとせば、是れ詩人の理想を寫したるものにして、昔在りし世界には非ず、今より來らんとする世界也。而して此の如き思想を有せるは唯イスラエル國民のみに非ず、何れの國民も之と同一の傳說を有し、太古には黃金世界ありしとなせり。是れ即ち人類の理想を寫せるものにして、彼等が現實の世界に滿足すると能はず、更に高尙にして完全なる世界に達せんとせるを示せるものに非ざるはなし。使徒保羅は其獨創の宗敎的哲學的見地より此人類の希望を述べて云く、『夫れ受造物の切望は神の諸子の顯れんことを俟てる也。そは受造者の虛空に歸らせらるゝは其願ふ所に非ず即ち之を歸らす者に依れり、又受造物自ら敗壞の奴たることを脫れ、神の諸子の榮なる自由に入らんことを許されんとの望を有されたり、萬の受造物は今に至るまで共に歎き共に勞苦ることあるを我儕は知る、唯此等のもの耳ならず、聖靈の初めて結べる實を有てる我儕も亦自ら心の中に歎きて子とならんと即ち我儕の身体の救はれんことを俟つ』と。人類は神の形像に象どられて造られたるものにして、地より出でたるに非ず、天より來りたるものなれば、今日の不完全なる有樣を以て滿足すると能はず、必らず神に歸り神に同化せんことを欲す。是れ理想の生ずる所以也。

抑も人類の古來より希望せる理想世界なるものは如何なるものなりや、之を歷史的に研究せんには千差萬別一樣なる可らずと雖も、一言にして之を約すれば、完全なる人類社會に外ならず。而して如何なるものか之を完全なる人類社會といふ。蓋し思ふに社會を形づくる一個人が

各其自由權利を享有すると共に社會全体の利益幸福を增進するもの是れ完全世界にして、換言すれば個人の幸福と社會の利益と相背馳するとなく、却て能く一致し、併行し、調和せるもの是れ豈吾人の理想せる人類社會に非ずや、

神の王國（下）

此完全なる人類社會の理想の最も明白に最も正當に顯はれたるを神の王國の觀念也とす、神の王國の觀念は基督教訓の中心也、彼れ公に其教を宣傳せんとするや即ち述べて云く、『期は滿てり、神の國は近けり、悔改めて福音を信せよ』と、彼れ又其弟子に祈ることを教へて云く、『爾曹かく祈るべし、天に在ます我儕の父よ、願くは聖名を尊崇させ玉へ、爾國を來らせ玉へ、爾旨の天に成る如く地にも成せ玉へ』と、彼れの來れるは實に神の王國を地上に建てんがためなりき、故に福音書記者は記して云く、『耶蘇ガリラヤを遍く巡り其會堂にて教をなし、天國の福音を宣傳へたり』と、耶蘇數萬言の教訓は即ち是れ神の王國の福音なりしも也、

抑も神の王國とは何ぞ、概言すれば神の人民の集合して組織したる社會にして、社會を構成せる一個人なるものは各々神の民たる自由と權利とを保有し、而して之と共に神の聖意に從ひ各自愛に依て結合し常に社會全般の利益幸福を進捗するもの是也、使徒保羅は最も簡短なる言語を以て神の王國の形狀を述べて云く、『神の國は義と和と聖靈に由れる歡樂に在り』と、換言すれば神の王國は即ち完全なる人類世界にして、此王國の地上に建設せらるゝ時は即ち人類が其理想を實現せる時也、

人類の歴史なるものは素より自由を備へたる人類の自ら造くるものなれ共、人類の上に又歴史の進行を支配するものあり、學者が『歴史は神の意匠の實際に行はれ往くもの也』と云へるは即ち是也、古來幾多の國家は興りて又亡ひ、幾多の英雄は起ちて又仆れたり、然れ共是れ決して偶然に非ず、畢竟神が其一大目的を達せん爲に用ゐ玉へる攝理に外ならざる也。

然らば即ち神の一大目的とは何ぞ、云く、神の王國を地上に建設せん事是也、而して歴史とは畢竟此一大目的の實際に成就せるものに外ならず、見よ猶六の歴史は先づ最も適當なる地を耕して此一大觀念を植え付けられたるものにして、希臘羅馬の歴史は此一大觀念を世界人類に傳播せん爲に選ばれたる準備的機關なりき、時至り機熟して耶蘇基督ば來れり、彼は既にイスラエル國民の中に其萠芽を發せる此一大觀念を開發し、最も明白なる形狀を以て之を宣傳したり、使徒等は彼が宣傳せるものを更に宣傳せん爲に選ばれたる機關に外ならざりき、オリジエン、オウガスチン、ルーテル、ヅウイングリー、カルビン、ウエスレー及びノックス等は此一大王國を建設せん爲に用ゐられたる器械に外ならざりき、豈唯に神學者、宗教改革家のみならんや、政治家も、哲學者も、文學者も、詩人も、美術家も、工藝家も、軍人も、商人も、畢竟此一大目的を成就せん爲に神の使用し玉ひしものに外ならざる也、然り、過去千九百年の歴史は最も明に人類が此一大方向に向て進みつゝあるを示せり、而して歴史は今も後も尙此目的に向て進行して止まざる也。

完全なる人類社會の理想は神の王國にして、神の一大目的は此王國を地上に建設するに在りとせば則ち吾人の理想は知るべきのみ、願くは吾人をして神の王國を建設する爲に生きしめよ、神の王國を建

設するもの何ぞ必ずしも牧師、傳道者のみならんや、神の王國の事業又何ぞ必ずしも直接傳道のみならんや、政治も文學も美術も科學も實業も悉く神の國の事業にして、政治家も文學者も美術家も科學者も實業家も、廣義に於て悉く祭司也、宗教家也、吾人又何ぞ其事業の相違を論ずるを要せん、苟くも基督を信ずるの徒ならば神の此一大目的を助け、此一大事業に一臂の力を致さゞる可らず、是豈に吾人の理想に非ずや、昔者フレデリッキ、ロボルトソン少年にして其日記に書して云く、『我れ一日善を爲さずんば生くるの價値なし』と。吾人は將さに云はんとす、吾人一日神の王國を建設する爲に力を盡さずんば生くるの價値なしと、

然らば則ち吾人は如何にして神の王國を建設し得べきか、云く先づ自ら神の王國の民とならざる可らず、神の王國とは神を中心として立つ所の王國也、神の聖旨と權威とが天に行はるゝが如く地に行はるゝ謂也、故に神の王國を建設せんとする政治家は必らず神を信ずるものならざるべからず、神の王國の事業に與らんとする文學者、美術家、科學者、實業家は己れ先づ宗教なる基礎の上に立たざる可らず、

然らば則ち神の王國の民たるものゝ資格如何、最も明白に神の王國の意義を知るは是れ其第一要義也、換言すれば吾人は先づ其信ずる所を最も明白に領解せざる可らず、若し己の信ずる所に關し明白なる觀念を有せざらんか、或は陷りて懷疑不信の境に入るべく、或は流れて迷信惑溺の風に沈むべし、コルリッヂ云く、『聖書の他教の經典に比して著しき相違ある點は智識を重じ研究の精神を鼓舞する事是也』と、然り基督教は理性を輕蔑するものに非ず、若し之を輕蔑せんとするものあらば是れ未だ其知るべき處の事を知らざるもの也、亦何ぞ王國の民た

るに在らんや。

神の王國の民は又最も其生活を重せざる可らず。基督云く、『我爾曹に告ん、學者とパリサイ人の義よりも爾曹の義きこと勝れずば必らず天國に入ること能はず』と。王國の民は世の國の民よりも高尚純潔なるべきを云ふ也。所謂高尚純潔とは消極的に凡ての罪惡と絶對的に絶緣するのみならず、積極的に德を積み、善を行ふの謂也。保羅云く、『靈の結ぶ所の果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、温柔、撙節』と、彼得云く、『爾曹勤めて信仰に德を加へ德に智識を加へ、智識に撙節を加へ撙節に忍耐を加へ忍耐に敬虔を加へ敬虔に兄弟の睦を加へ兄弟の睦に愛を加ふべし』と。是豈王國の民たる者の資格を最も簡明に道破せる者に非ずや。而して神の王國の民たるものは王國を建設せん爲に其全身全靈を献ぐるの覺悟あるを要す。保羅云く、『我れ神の諸の慈悲を以て爾曹に勸む、其身を神の意に適ふ聖き活る祭物となして神に献げよ、是れ爲すべきの祭也』と。基督云く、『爾曹は人の僕となり人に役はるゝ者となるべし』と。献身と勞役とは王國の民の二特質也。此特質なくして如何ぞ王國建設の任を盡すを得んや。

吾人召されて神の王國の民となる、一臂の力を王國の建設に致すを得るは誠に至大の特權、無上の榮譽也。願くは此大事業を成就せん爲に全心全力を盡さんかな。

平凡の福音（上）

口を開けば則ち預言者と云ひ、偉大なる人物と云ひ、英雄豪傑と云ひ、學者大人と云ふ。言素より爽快也、血氣旺盛、氣宇天下を呑んとするの青年之を聞て豈神飛び肉躍るを覺えざらんや、而かも之を基督教の福音と

して見ば、事に於て益する所果して幾何。

基督教をして若し或る少數人士の宗教也とせば、預言者を說き、偉大なる人物を說くと決して不可なるに非ず、而かも吾人の信ずる所を以てすれば、基督教は萬民の宗教也。基督は英雄を造らんが爲めに世に來らず、非人を救はんが爲めに世に來れり。大人を敎へんが爲めに世に來らず、普通の生活を敎へんが爲めに世に來れり。願くば吾人をして寧ろ平凡の福音を說かしめよ。

花とならば上野、墨陀の櫻花となりて幾多都人士の足を引きたし、人とならば英雄豪傑となりて歷史の頁に其名を留め、幾多の稱讃家、崇拜者を得たしとは凡ての人の心なるべし。是豈必ずしも不當の希望ならんや。基督教は決して人の名譽心を抑制するものに非ず、古來幾多の英雄と豪傑と大哲學者と大政治家と大文學者と大事業家と大冒險家とは基督教會の中より輩出したりし也。基督教は人の名譽心を潔む、然れ共之を抑壓せず。基督教は大人物たるの資格を與ふ、又何ぞ之を阻止せんや。然れ共大人物とは限りあるの數也。萬人豈悉く大人物となるを得んや。ゼベダイの子等の母嘗て其子と偕に基督の許に來り請ふて云く、『此二人の子を爾の國に於て一人は爾の右一人は爾の左に坐ることを命せよ』と。基督答へて云く、『我が左右に坐ることは我が賜ふべきに非ず、唯我父に備へられたる者は與へらるべし』と。所謂天才とは天の殊に與へ玉ふ所のもの也。或は英雄たり、或は豪傑たり、或は大政治家たり、或は大文學者たり、或は大事業家たる天才を與へられたるものは、宜しく其與へられたる所に從て英雄となり、豪傑となり、大政治家となり、大文學者となり、大事業家となるべし。然れ共是れ凡ての人の企及すべき所に非ず。基督曾て喩話を以て天才の各々相異なれるを說きて云く、『天國

は或人の旅行せんとして其僕を呼び、所有を彼等に預くるが如し、各人の智慧に從て或者には銀五千、或者には二千、或者には一千を與へ置き直ちに旅行せり』と。五千、二千は是れ世の所謂天才也、或人は實に五千、若くは二千の銀を與へられたりと雖も、是れ少數人士のみ、其他は一千を與へられたるに過ぎず、保羅の爲したる大事業は吾人の欽羨に堪へざる所也、オリゲン、オウガスチンの神學上に與へたる偉績は吾人の稱讃する所にして、ルテル、ウエスレーの宗教改革に貢獻したる偉大なる功業は吾人の贊歎する所也、然れ共是れ唯保羅オリゲン、オウガスチン、ルテル、ウエスレーにして爲し得べき事にして、凡ての基督教徒の爲し得べき處に非ず、故に保羅たり、オリゲンたり、オウガスチンたり、ルテルたり、ウエスレーたるものは宜しく保羅たり、オリゲンたり、オウガスチンたり、ルテルたり、ウエスレーたるべし、彼等は是れ五千の銀を與へられたるもの也、五千の利を得ざる可らず、然れ共吾人にして一千の銀を與へられたりとせんか、宜しく之に滿足し、一千の利を得ん爲めに働かざる可らず、然り平凡の人よ、普通の人物よ、爾曹は宜しく平凡の生活に滿足し、普通の生涯に於て基督教徒の如く行ふべし、是れ實に基督の吾人に求め玉ふ所也。

基督教が平凡の宗教なるは、基督が萬民を救はん爲に來れりと云へる一事に依りて之を知るべし。基督は決して智者、學者、富者を疏外し玉はざりき、而かも彼が最も心を盡して救はんとし玉ひしものは稅吏、罪人の徒なりき、基督教にして若し大人物を造らんとするものとせば、萬人悉く大人物となるを能はず、又如何にして彼等を救ふことを得んや、基督教が天下に勢力を有する所以のものは實に平凡の人を目的とし、平凡の生涯を敎ふるに依らずんばあらず、或人は之を哲學的にせんとし、

或人は之を神秘ならしめんとし、或人は之を預言者の宗教となさんとし、或人は之を宗教改革家の宗教となさんとせり。然れ共人の人たるは其哲學的なる所にあるに非ず、其神秘的なる所にあるに非ず、其預言者的なる所にあるに非ず、其宗教改革家的なる所にあるに非ずして、其平凡なる所に在り。其普通なる所に在り。人の人たるは英雄も豪傑も智者も學者も無學者も卑賤の者も異なるとなし。ゲーテ云く、『人類は進歩す、人は常に同じ』と、吾人は云はんとす、『人の天才は各々異なれり、人は相同じ』と。此同一の人を教ふるは是れ基督教の目的也。妄りに之を哲學的になし預言者的になすは是れ豈基督教の使命を誤るものに非ずや。

平凡の福音（下）

基督曾て其弟子等に教へて云く、『爾曹の中大ならんと思ふものは爾曹に役はるゝ者となるべし、又爾曹の中首たらんと思ふものは爾曹の僕となるべし』と。是れ豈吾人に平凡の生活を教へたるものに非ずや。人の首たるものは限りあり、人を役使するものは唯少數人士のみ。人もし悉く人の首たり、人を役使せんと欲せば豈失望せざらんや。故に吾人の學ぶべきは人の首たる道に非ずして人の僕たる道なり、人を役使するの道に非ずして人に役使せらるゝ道なり。換言すれば英雄豪傑學者大人となる道に非ずして無名の英雄となり、無名の働をなすの道也。吾人が人として學ぶべき道は唯是のみ。

試に基督の生涯に就て之を見よ。彼が空前絶後の偉人なりしは云ふ迄もなし。然れ共彼は世の英雄豪傑の如くならざりし也、世の學者大人の如くならざりし也、彼は自ら云へりし如く、人を役使したる者に非ずし

て人に役使せられたるものなりき、人の首たる者に非ずして人の僕たるものなりき。彼が偉大なりしは寧ろ其平凡なる生涯に在りき。見よ、彼がナザレに在りし三十年の歴史は寒貧なる大工の子として、父と共に工事を營み、父死して後其得る所の工錢に依りて母と弟妹等を養ひたりしといふの外何物も吾人に傳はらざるに非ずや。彼が三年の公生涯なるもの亦諄々として道を說き、病める者を癒し、惡魔を逐ひ出したりといふの外、何物の人目を驚ろかしたるものなかりしに非ずや。故に使徒馬太は預言者イザヤを引て彼が生涯の有樣を叙して云く、『彼は競ふことなく、喧ぶことなし、人街に於て其聲を聞くことなし』と。當時羅馬の政府は彼を以て殆ど齒牙に掛くるに足らずとなしたりし也。當時羅馬の學者は殆ど彼を念頭に置かざりし也。彼が猶太人に賤しめられ、棄てられ、殺されたりしは、彼が赫々たる功業を立てたりしが爲に非ずして、寧ろ赫々たる功業の彼等の耳目を聳動し、彼等の心を滿足せしむるものの勿かりしが爲めなりし也。

又試に基督と共に福音書中に顯はれたる人物を見よ。彼等は悉く平凡なる普通の人物に過ぎざりし也。夫の十二使徒と稱するものはガリラヤ湖水の漁夫に非ざれば、羅馬政府に傭はれたる收稅吏なりき。基督が『我は此の如き篤信者に逢はざりき』と稱讃したりしは、羅馬の百夫長にして、『我福音の宣傳へらるゝ處には此婦人のなしたる事も紀念として傳へらるべし』と稱譽したりしはマリアと稱する一賤婦なりき。而して福音書中の人物が爲したりし事業なるものも亦赫々たる功業に非ずして、殆んど平々凡々云ふに足らざるが如きものなりき。例之稅吏の長ザーカイがなしたるは、其强奪したるものを倍して返還したりしとの事にして、貧しき寡婦の爲したるはレプタ二つを賽錢箱に投じたりし

といふに過ぎざりし也。基督は吾人に向て難を求むるものに非ず。吾人もし吾人平生の生活に於て神を愛し人を愛するの精神を以て、吾人力の及ぶ所を盡さば、是れ基督の徒たるに於て耻づる所なき也。

然るに吾人屢々思へらく、天下の事は須らく人目を驚かし、人耳を聳かすものならざる可らずと。於是吾人皆赫々の名ある功業を立てんと欲す。是れ大に誤れり。赫々の功業素より善ならざるに非ず、而かも基督教の見地よりすれば、貴ぶべきは精神のみ、動機のみ、事業の大小は必ずしも問ふべき所に非ず。那翁は大英雄也、其の事業の大なる殆んと比すべきものなし、而かも其の人類に寄與せし所果して幾何、幾多の人命を殺し、天下の親と妻と子とを泣かしめたりしといふの外吾人何物をも彼より望む可からず。平凡の生涯と平凡の事業とは之に異り假令天下の耳目を聳動することなきも世の文明と人生の幸福に寄與す照す光あること甚だ大也。例之夫の蒸氣機關の如し、氣關車を動かす車あり、道を

り、危險を報ずる爲めに用ゆる氣笛あり、是等のものは悉く有用にして欠く可からずと雖も、而かも人の耳目に觸れずして、此等のものを生ずる動機となる者は釜中に焚かるゝ石炭に非ずや。例令ば夫の戰爭の如し、硝煙彈雨の中に奔馳して奮擊突戰するは素より甚だ勇ましと雖も、人の耳目を驚かすものなくして、而かも此等のものにまさりて必要なるは、戰士に糧食を給する兵站部の働に非ずや。西人云く、搖籃を動かす手は天下を動かすと。人は天下を動かす英雄豪傑の事業を見て、搖籃を動かす柔弱なる手の如何に力あるやを見ること能はず。然り、世人は自ら氣笛を吹きならして天下の人に知られんとを欲し、勇ましく戰場に戰ふて勇名を天下に擧けんとを欲す。而して彼等は平凡なる生涯、靜肅なる事業の如何に世に有用なるかを思はざる也。誤れりといふべし。昔者

ヘンリー、マルチンケンブリッヂ大學を卒業し、印度傳道の行程に上るや、祈りて云く、『神よ、榮譽ある愉快なる地位は請ふ他人に得せしめよ、余をして無名にして、最も困難の地に在て、安せしめ玉へ』と。教父ダミエン布哇に在り、一日癩病島の有樣を聞き祈りて云く、『神よ、我れ爰に在り、我を遣はし玉へ』と。即ち身を以て其島に往き一生を癩病人の救護に盡し、身又之が病毒を受けて逝けり。是れ豈基督の所謂人の僕となり、人に役使せらるゝの精神を實行したるものに非ずや。夫の徒に大言壯語して而して實行の曾て之に伴ふとなきもの須く愧死すべき也。

夫れ溪間に人の訪ふとなき無名の花には却て天眞爛熳の掬すべきものあり。歴史の頁に其名を錄せられざる無名の英雄には却て有名なる英雄に優れるうるはしき情のこもれるものあり。吾人の望むべきもの亦何ぞ赫々たる名譽のみならんや。無名の地に往き無名の業をなして、無名の生涯を送るも亦ゆかしき事に非ずや。小學の教師たるもの、官廳の小吏たるもの、人の僕婢たるもの亦何ぞ其職を以て小なりとせんや。基督の心は此所に有し得らるゝ也。基督の事業は此所に爲し得らるゝ也。吾人は世の基督教徒が徒に大言壯語するとなくして普通の生活、平凡の事業に最も心を用ゐんことを希望するもの也。

耶蘇基督

カライル云く、『世界の歴史は畢竟大人の歴史なり』と。然り、世界の歴史も、國民の歴史も其實大人の歴史に外ならず。彼等は社會民衆の模型也、嚮導者也、創造者也。見よ、摩西、約書亞、ギデオン、撒母耳、ダビデ、ソロモン、以賽亞、耶利米亞等の歴史はイスラエル國民の歴史を造り、ライカーガス、ソロン、ミルチアデス、エパミノンダス、歴山、ソクラテス、プラトー等の歴

史は希臘國民の運命を定め、ロミユラス、クローディアス、シーザー、ポンペー、アントニー、カトー、シセロ等の歴史は羅馬帝國の歴史を造りしに非ずや。歴史上の大運動とは畢竟社會民衆が偉人の足下に服從せるの謂に過ぎず。カライルが大人を以て天より來れる閃光となし、其他の人々は之を待てる燃料のみと云へるも、決して過言に非ざる也。

吾人は偉人を愛す、唯に古に於ける偉人を愛するのみに非らず、又近世に於ける偉人を愛す。大雄辯家としてはビーチャーを愛し、大說敎家としてはスポルジョンを愛し、大政治家としてはグラッドストンを愛し、大宣敎師としてはリビングストンを愛し、大詩人としてはテニソン、ブラウニングを愛す。彼等の品性と、彼等の事業とは永く世界民衆を感化し、造成すべければ也。

然れ共吾人が凡ての偉人に勝りて、凡ての愛と、凡ての尊敬とを捧ぐるものは耶蘇基督也。彼は宛も富嶽が群峯を拔きて獨り天表に聳立せるが如く幾多の偉人を拔きて獨り高く歴史の上に立てり。而して彼が歴史は其最も眞實なる意義に於て、世界歴史の下底に在る也。

抑も此耶蘇基督は何人ぞや、吾人請ふ試に古來彼に關して爲されたる證言を示さん。

『我は人を知る、耶蘇基督は人に非ざる也』とは、那破崙の證言也。彼れ假令力山を拔き、氣世を蓋ふの勇氣ありと雖も、晩年顧みて一生の功業を思ひ、之をナザレの耶蘇三年の事業に比せば亦何ぞしかく感せざるを得んや。和蘭の哲學者スピノザは、『耶蘇は神の聖殿也』と稱讃し、佛の哲學者ルーソーは、『ソクラテスの死は哲學者にふさはしく、基督の死は神にふさはし』と讃歎し、耶蘇傳の著者ストラウスは福音書の記事に關し、異說を唱へたりしも、尙彼を讃美して、『基督は比類なき宗敎上の天

才也、絶對なる宗教を創立せしは古今此人一人のみ』と云へり。ヘンリー、ウオルド、ヒーチャーは其雄大なる言語を以て云へり、曰く『世は去り、國は亡び、又他の國は起るべし。律法は廢り、而して新なる律法は又造らるべし。古き文明は壞れ、更に高尚なる文明は新紀元と共に來るべし。然れ共世の終に至るまで、此人は歴史の中に在りて何人よりも高く立つべし。凡ての人に勝れる名は彼に與へられたり』と。吾人更に文學者に往きて其證言を求めんか、ゲーテは『世の中に進歩の必要なきもの唯一人あるのみ、而して福音書中に顯はれたる道德上の威嚴と靈性上の品格は空前絶後也』と云ひ、シルレルは『基督は肉を受けたる聖潔也』と云へり。而してテニソンは其有名なる『イン、メモリアム』の冒頭に於て、彼を稱讃して、『神の强き子、不朽の愛』と云ひ、ブラウニングも亦其詩の一に於て左の如く云へり、

"But Easter Day breaks, but,
Christ rises, mercy every way
Is infinite."

吾人最後に使徒保羅の言を引かん、彼れ云く、『神は甚しく彼を崇めて諸の名に超る名を之に予へ給へり、此は天に在る者の地に在る者及び地の下に在る者をして悉くイエスの名に由りて膝を屈めしめ、且諸の舌をして悉くイエス、キリストは主也と稱揚して父なる神に榮を歸せしめん爲め也』と。嗚呼是れ我等の主耶蘇基督也。吾人は此世界的、萬世的偉人を主とし師となす、豈感激發奮して此身と此靈とを彼に献げ、彼より偉大の感化を蒙らざらんや

基督の教訓は實際に行はれ難きものなるか

米國の牧師チャーレス、シエルドンが著はしたる『みあしの跡は』近來出でたる著作の中、最も賣高多かりしもの、一にして、洛陽の紙價を貴からしめたるの觀ありしは世人の普く知る所也。而して此書は唯に多くの人に依りて讀まれたりしのみならず、又多くの人に由りて樣々の批評を蒙りたりき。著者の云ふ所に依れば著者は唯に新聞雜誌の上に於て幾多の批評を蒙りたりしのみならず、又直接に多數の讀者より書面に依りて多くの質疑を受けたりしといへり。著者は其當時此等の書面に答へんが爲め『基督敎は世の事業を爲す上に於て實際行はれ得べきものなりや』と題せる論文を草して一雜誌に寄せ、基督の敎訓に從ひ、其足跡を履むは唯に實行し得べき事なるのみならず、今日世界の大勢は漸く基督敎の眞意義を領解するの傾向ありとの事を述べたりき。こは既に二三年以前のことなれ共、今日我國に於て基督敎に對する最も大なる疑問の一は、基督敎の敎訓は果して實行し得べきものなりやとのことなるが如し。見よ、世には既に基督敎の何物たるやを知り、之を信ぜんとするの念切なれ共、世の事業を爲す上に於て果して實行し得べきものなるやを疑ひ、容易に其心を決すること能はざるものあり。又一旦基督敎を信じたるものにても、一たび社會に出でゝ實務に從事するに方りては、竊に其所信を實行するの難きを歎じ、遂に心ならずも當初の志に背きて信仰を棄つるもの少しとせず。抑も基督敎は果して此の如く世の中の實際に行ひ難きものなりや。素より我國の如く基督敎の未だ十分傳播せざる國に在りては、幾多の偏見誤解あるとなれば、吾人が斯かる間に處して其所信を貫かんとの至難なるは云ふまでもなし。故にこは別問題として、基督敎を以て實行し難しとする重なる故障は果して何ぞや。思ふに基督の敎訓を其儘に實行する時は萬事に失敗すべし

といふは其重なる故障の一なるべし斯る故障の生ずるは畢竟人生々活の意義を誤りたるが爲なれ共既に一たび基督教を信じたるものさへ尙斯る誤解を免れざるものあるは歎ずべきの至り也

誤解とは何ぞや先づ第一は成功を以て吾人行爲の標準となす事是也

若し如何なる手段を取るも如何なる方法に依るも成功は吾人生活の目的也とせば基督の教訓は最も不便なるものにして基督の行爲に倣ふは疑もなく失敗の基なるべしと雖も成功は果して人生の目的なるべきや抑も亦何を成功とし何を失敗とすべきや元來成敗なるものは唯事の結果に依りてのみ斷定すべからず其之を爲せる動機と其取れる方法とは成敗を斷ずる最も重要なる條件として考察せられざる可らず此點より論ずれば正道を履んで敗るゝは邪道に從て勝つに優れり且成敗なるものは一時の事に依りて決すべきものに非ず世の所謂成功なるものは百年の後より之を見れば失敗にして世の所謂失敗なるものは却て大成功なるの例は古今甚だ乏しからず例之基督の事業の如き當時より之を見れば疑もなく大失敗たりしと雖も今日より之を見れは彼の事業の如く成功したるもの未だ之れあらざる也去れば一時の成敗を以て吾人行爲の標準となし目前の成功を得んが爲に苦心慘憺たるが如きは人生の眞意義を解せざる精神的近眼の見と云はざる可らず

凡俗の毀譽褒貶を過重するは又基督の教訓を實際に行はれ難からしむる所以也とす夫の基督が猶太人が彼を信ずる能はざりし理由を說示して『爾曹は互に人の榮を受けて神より出づる榮を求めざる者なるに如何でよく信ずることを得んや』と云へるは千古の眞理を云ひ顯はせるものにして今日の人が基督の教訓に從ふ能はざる理由の一も

亦爰に在りとす。

然れ共何れの世も先祖が殺したる預言者の墓を立てざるはなく、今日『至上處にホザナよ』と呼べる聲は、明日『十字架に釘よ、十字架に釘よ』との聲に變せざるもの未だ之れあらざる也。使徒保羅曾て自己の經驗を述べて云く、『我れ人に評らるゝ事を以て最も細事となす。我れを評る者は主也』と。主の榮を棄てゝ徒に愚昧なる凡俗の毀譽褒貶に其心を煩はすか如きも亦人生の眞意義を知らざる近眼者流の見と云はざる可らず。金錢を得るを以て人生行爲の標準となすも亦基督の教訓を實際に行はれ難からしむる一の理由也とす。蓋し今日の如く人心金錢の一事に集中せる時はなかるべし。『屍の在る處には鷲集る』、金錢の在る處には政治家も往き、學者も往き、著述家も、往き美術家も往く也。若し金錢を得ることにして吾人生活の目的也とせば、基督の教訓は最も不利にして、基督の行爲に倣ふは失敗の基なるべしと雖も、人生々活の目的は金錢を得て富み且榮ふることに非ず。夫の鋼鐵王カーネギーは曾て其實驗を述べて云く、『金錢は人類をして幸福ならしむるものに非ず、もし文界の老雄シエークスピーア、音樂界の泰斗ワグネル等にして此世に存在せざりしならんには余の生涯は實に不幸極まれるものならざる可らず、單に財を造らんが爲に生存する金滿家なるもの丶生活は實に不快なるもの也』と。是れ決して負け惜みに非ず、其實驗より來れる語にして、彼が其得たる財貨を散せんとして汲々たるもの故なきに非ず。然るに金錢を得るを以て人生行爲の標準とし、之が爲には何事を爲しても憚からざる如きは、人生の意義に通せざる盲目者流の見也と云はざる可らず。

以上述べたるが如きは吾人より之を見れば、甚だ見易き道理にして殆

ど辯を費すを要せざるが如しと雖も、世の實際に於ては此等の意義未だ明ならず、爲に基督教をして實際に行はる可らざる宗教の如く思惟せしむるに至れり。シエルドンが其著書の爲め幾多の批評と質疑を受けたりしといふもの實に之れがため也。米國に於て尙然り、況や我國に於てをや。吾人は基督教の眞意義と人生の眞意義とが益々明白となり、基督の教訓なるものは決して實際に行はれ難きものに非ずとのことが益々世人に了解せらるゝに至らんことを切望して止まず。

常識

英語のコンモン、センス之を譯して常識といふ。常識に二箇の意義あり、哲學上の意義及び通常の意義是也。吾人の爰に所謂常識とは云ふ迄もなく通常の意義に於けるそれ也。

然らば則ち通常の意義に於ける常識とは何ぞ、一言にして之を云はんと頗る難し。然れ共吾人請ふ試に之を説明せん。

吾人の考ふる所を以てすれば、人情を理解し人情に外れざらんことを務む、是れ常識也。人の往くべき道を往き、人の走るべき軌道を走る、是れ常識也。人の喜ぶ所を喜び、人の悲む所を悲む、是れ常識也。熱心は嘉すべし、然れ共其極奇狂の行爲をなすは是れ常識なき也。吾人は世人躍らざるも笛吹かざる可らざる時あり、世人悲まざるも胸うたざる可らざる時あり。世人が狂喜せる時に『禍なる哉』と叫び、世人が『平康々々』と云ふ時に『危し危し』と呼ばざる可らざる時あり。而かも吾人の之を爲すや智惠を要し、思慮を要す。妄りに奇狂の言を弄し、奇狂の行を恣にし、徒に世人の嘲笑と憤怒とを買ふが如き豈常識あるものゝ所爲ならんや。

常識とは又偏窟に反するの謂也。氣質の偏窟あり言論の偏窟あり、行爲

の偏窟あり、而かも偏窟は一にして常人と合ひ難し、又何ぞ常識と一致するとを得んや。

更に之を云へば常識とは正當の判斷力を有し、臨機應變宜しきに處するの謂也。凡そ事には言ふべき時あり、言ふべからざる時あり、爲すべき時あり、爲すべからざる時あり、之を判斷して言ふべき時に言ひ爲すべき時に爲すは是れ常識也。若し夫れ卑近の例に就て之を云はんか、婚姻の席上に於て悲しき物語をなし、葬禮の式場に於て輕浮の言行を爲すが如き、若しくは醜婦に向て美人を褒め、色黑き人の面前にて黑奴の事を語るが如き、若しくは多忙なる人を訪ふて長座をなすが如き、是れ時宜を辨へざる也。是れ常識を失へる也。其結果人の感情を傷け、自己の品位を害す、愼まざる可らざる也。

吾人の之をいふもの他あんらや、今日の基督教徒は概して之を論ずれば常識に於て欠くる所あるを覺ゆれば也。吾人は彼等が此點に於て世人よりも多く欠けたるや否やを知らず、而かも吾人は今日の基督教徒が一層此點に於て注意すべきものあるを感せずんばあらず。

吾人の信ずる處を以てすれば基督教は常識を有する人を造くるの宗教也。奇狂偏窟の人を造くるは其目的に非ざる也。基督曾て云く、『爾曹蛇の如く智く、鴿の如く柔和かれと』。是れ豈吾人が智者の如く行ひ、紳士の如く行ふべきを敎ふるものに非ずや。試に保羅の敎ふる所を聞け、云く、『兄弟の愛を以て互に愛し禮儀を以て相讓れ』。云く、『喜ぶ者と共に喜び哀む者と共に哀むべし』。云く、『行し得べき處は力を盡して人々と睦み親むべし』。云く、『我儕强者は强からざる者の懦弱を負ひて己の心に悅ばざるを爲すべき也』。云く、『我儕各々隣の德を建てん爲に善を以て之を喜ばすべし』。云く、ユダヤ人には我れユダヤ人の如くなれり、律法なき

者には我れ律法なき者の如くなれり、柔弱者には我れ柔弱者の如くなれり、又凡ての人には我れ其凡ての人の狀に循へり』と。是れ豈常識の宗教を敎ふるものに非ずや。

悔改

新約聖書の吾人に示す所に依れば、悔改とは感情に非ず、又感情は悔改の重要なる部分にも非ず。吾人は悔恨と悔改とを區別せざるべからず。吾人は涙を以て必ずしも悔改に伴ふ現象也と斷定す可らず。千行の涙ありて眞の悔改ならざる者あり、一滴の涙なくして眞の悔改なるものあり。祈禱會の席上に聲を振はし涙を流すものあるを見て、直ちに之を悔改者となすは未だ聖書の悔改を解せざるもの也。

悔改は又懺悔若しくは苦業と同じからず。羅馬教徒は悔改と苦業とを同一視し、以えらく、斷食をなし、睡眠を廢する等凡て身心を苦むるは悔改の實を表せる也と。然れども此の如きは物質的、器械的の考にして、素より、新約聖書の教訓に非ず。或は以えらく、悔改とは行爲の變化也と。眞の悔改は素より行爲の變化に伴はざる可らず。然れども行爲の變化を以て直ちに悔改と同一視するは誤れり。例之酒客の變じて禁酒家となり、懶惰なるものゝ變じて勤勉家となり、放蕩息子の變じて謹直家となるが如き必ずしも之を以て悔改となすべからず。何となれば此の如き變化は基督教を待たざるも屢々爲し得べきものなれば也。

然らば則ち聖書の悔改とは何ぞ。云く、人の智的靈的性質の全き革新是也。而して吾人の悔改は先づ吾人の思想に於て始まらざるべからず。即ち吾人は神に關し、神と吾人との關係に關し、吾人の神に對する責任に關し、吾人の神に對する行爲に關して正當なる智識を得ざるべからず。

換言すれば吾人の世界觀と人生觀とは神を知り基督を知ることに依りて全く變化せざるべからず既に此の如く思想に於て變化す吾人の道德的精神的性質は一大革命を來さゞるを得ず即ち吾人の舊人は死して新人となる也聖書の悔改とは實に此の如きもの也

エマーソン云く『彼の思想を變化せよ、サラバ彼の人物を變化し得べし、此外彼を變化するの道なし』と悔改の第一歩は實に思想也舊來の思想を持し舊來の信仰を改めず、よし千行の涙を以て己が罪を悔ゆと云ふも、今より神聖なる生活を爲すべしと云ふも、未だ之を以て悔改となすべからず聖書に云く『我に汝の心を與へよ』と心とは徒に心情といふに非ず智情意全體を云ふ也若し夫れ一時の感情に支配せられ容易く生涯の方向を定むるの大決心をなし、而して其心性依然として變することなくんば假令一時身を基督教會に投するも忽ちにして路傍の人たらざるもの未だ之れあらざる也

謙遜

基督山上の說教に於て劈頭先づ喝破して云く『心の貧しき者は福也、天國は其人のものなれば也』と心の貧しきとは思想の足らざるを云ふに非ず感情の乏しきをいふに非ず又勇氣の足らざるを云ふにも非ず己の不完全を自覺し深く自ら謙虛抑損するを云ふ也彼は又嘗て嬰兒を呼び之を其弟子の中に立たしめて云く『凡そ天國に在るものは斯の如きもの也』と亦其弟子を誡めて云く『爾曹の中大ならんと思ふものは爾曹に役はるゝ者となるべし、又爾曹の中首たらんと思ふものは爾曹の僕となるべし』と基督が吾人に謙遜を敎ふるや誠に盡せりといふべし。英國文豪カライルが基督敎を稱して謙德の宗敎也といひしも誠に故、

ありといふべし。

然れ共基督教の所謂謙德とは何ぞや、カーヂナル、ニューマン嘗て云へるあり、曰く『新教徒の大なる德は自重也、羅馬教徒の大なる德は謙遜也』と。蓋しニューマンは之に依て以て羅馬教徒を揚げ、新教徒を抑へんとしたりし也吾人は此言の中に大なる眞理を含めるを疑はず。然れ共吾人は自重なきの謙遜は聖書の謙遜に非ざるを知らざるべからず、何となれば自重なきの謙遜は畢竟卑屈に外ならざれば也。使徒保羅最もよく基督教の謙遜を吾人に教へて云く、『心を高ぶり、思を過すこと勿れ、神の各人に賜りたる信仰の量に從ひて公平に思ふべし』と。吾人は自己の價値に過ぎて吾人を計るべからず。然れども又之と共に自己の價値に劣りて自己を計るべからず。眞の謙遜とは自己を知らざるの謂に非ず、自己の眞地位と眞價値とを知りて此の如く思ふの謂也。故に云く『神の各人に賜りたる信仰の量に從ひて公平に思ふべし』と。

聖書は吾人に兩極の眞理を教ふ。云く『人は墮落せるもの也』『罪あるもの也』と。而して又云く、『人は神の像に像りて造られたるもの也』『神の子なり』と。使徒約翰は其同一の書翰に於て矛盾せるが如き眞理を述べて云く、『凡そ神に依て生るゝものは罪を犯さず、又罪を犯すこと能はず』と。而して又云く、『人もし罪なしと云はゞ是れ自ら欺けるにて眞理我儕に在るなし』と。此兩端の言は一見相反せるが如しと雖も共に眞理也。吾人は自己の墮落せる有樣を思ふては深く自ら謙虛抑損せざるべからず。而して又自己の神子たるを思ふては亦深く自ら重せざるべからず。吾人は如何に無學也とて自ら侮るべからず。神の前には吾人各價値を有する也。夫れ『目は手に我汝に用なしと云ふを得ず、又頭も足に我汝に用なしといふを得ず、體の中最も柔しと見ゆる肢は却て無かるべから

ざる者也』。吾人はよし基督の手足に過ぎずと雖も、尚手足の用ある也、吾人の首たる基督も亦吾人に向て『我汝に用なし』と云ふことを得ず。吾人豈自ら輕すべけんや。

要するに自重と、謙遜とは相反對せるものに非ず。否聖書の所謂謙遜は自重の上に立つもの也希はくは吾人をして謙遜の意義を誤らしむる勿れ。

新生に於ける三個の異りたる經驗

眞理の光明に接して基督教徒となるもの悉く一樣の通路より來るに非ず。其性質、其教育、其經驗及び其境遇の異なるに從て各々異りたる方法に依らざるべからず。凡ての悔改者をして悉く一樣の經驗を有せしめんとするは思はざるの甚しき也。蓋し思ふに吾人が眞理の光明に接し、聖靈の恩化に浴して新生するに少くとも三個の異りたる經驗あるが如し。第一は之を道德的新生とも稱すべし。夫の娼妓マグダラのマリヤが一たび基督の光明に接して全く新なる婦人となりたりしが如きは即ち道德的新生也。聖オウガスチンも亦此最良なる例證也。彼れ既に基督の神子たるを知り、基督教の眞正の宗教たるを知ると雖も、尚其罪を改むること能はず。放恣淫逸の生活を爲しつゝありしが、一日深く己の罪に責められ獨り庭園の樹下に坐して默想に時を移したりしに、忽ち聲の何處よりか來るを聞けり、云く『取て讀め』と。彼は手にせる聖書を取りて之を開きたりしに、偶然か抑も亦神の攝理か彼は羅馬書十二章十三節以下を開きたり、云く『夜既にふけて日既に近けり、故に我儕は暗昧の行を去て光明の甲を衣るべし、行を正くして晝歩む如くすべし、饗宴、醉酒、又奸淫、好色、又爭鬪、嫉妬に歩む勿れ、唯爾曹主イエスキリストを

衣よ、肉体の慾を行はん爲に其備をなすと勿れ』と。彼は之を讀みて心大に悟る所有り、全く其罪を棄てゝ新なる生活に入りたりき是れ豈道德的新生に非ずや。第二は之を智識的新生と稱すべし。ナタナエルが『ナザレより何の善きもの出でんや』とて耶蘇の基督たるを否みしに拘はらず、其一度親しく基督に接するや、直に彼を信じて『爾は神の子イスラエルの王也』と告白したりしが如き、マルチン、ルーテルが其罪の重荷に苦しみ、聖なる平和を得んとして羅馬に至り多くの巡禮者と共に羅馬寺院の階段を膝行しつゝありし時、『義人は信仰に由て生くべし』との聖句を思ひ出で、其迷信を棄てたりしが如き、眞理の光明に逢ふて年來の誤謬を悟り智識的新生を爲したるもの也。第三は精神的新生也。我有する眞理生命と變じ、事實となる所のもの也。蘇格蘭に博士チャルマースと稱する有名の神學者ありき。彼は熱心なる正統派神學者にして、清潔なる生活を爲せる人なりしかども、元來形式的にして至て冷淡、酷薄なる人なりき。然るに彼は一日人生の果敢なきことと、永遠の生命の無窮なることを思ひて深く己の冷酷を悔い、是より全く生れかはりて善良なる人物となりたりき。是れ共に精神的新生に非ずや。此の如く人は其性質と其經驗の異なるに從て其新生の道も亦同じからず。故に吾人は必ずしも凡ての人をして悉く一樣の經驗を有せしむるを要せず。眞理の光明に接し、神靈の恩化に浴し、舊人は去て新人となるの一點に於て一致すれば即ち可也。

我父の家　（二）

（天地は父の家也）

基督云く、『我父の家には第宅多し』と。普通の解釋に從へば是れ、云ふ迄もなく天を指せる也。死は萬事を終る者に非ず、人は死して天に往く也。天

には第宅多し。吾人多くの信徒は往きて此第宅多き天に住むことを得べき也。

曾て我が友の主に在るもの病て死せんとするや、側に侍せるものを呼び、此聖句を唱へしめ安然として逝けりき。人は未來を笑ふ。而かも未來の希望なきものは禍なる哉。見よ、バイロンは平生宗教家の未來を說くを笑ひたりしが、其死に臨むや恐懼を以て戰慄したりき。ゲーテも亦平生基督を信せざりしかど、其死に臨みては『我に光を與よ、我に光を與へよ』と絕叫したりき。ポルテールは有名の不信者也。彼平生神の審判を笑ひ、未來の賞罰を嘲りたりしが其死に臨むや心中の秘密を述べて『我は凡ての造られたるものゝ中最もあはれなるもの也。我は寧ろ此世に生れざりしならば幸なりしならん』と云へりき。然れども基督は吾人に敎へて云ひ玉へり。云く『爾曹心に憂ふること勿れ、神を信じ又我を信ずべし、我父の家には第宅多し、然らずば我豫て爾曹に之れを告ぐべき也、我れ爾曹の爲に所を備に往く、もし往きて我爾曹の爲に所を備へば又來りて爾曹を我に受くべし、我居る所に爾曹をも居らしめんとて也』と。故に吾人は死して望なきものに非ず、吾人の死するは天の父の家に往く也。基督信徒が死に臨みて安然として其靈魂を天の父に附すもの素より偶然に非ざる也。

基督直接の敎訓は思ふに此の如し。然れども之を以て單に天のみを指せりとなすは誤れり。當時基督の弟子等は其主の將さに此世を去らんとするを見て心大いに之を憂へたり。謂えらく、主もし一たび此世を去り玉はゞ幽明處を異にして再會の機なかるべしと。然れども基督は之に答へて云く、『否然らず、我は唯此第宅より彼の第宅に移らんとするのみ、而して是れ同じく我父の家なるのみ』と。我父の家豈唯天のみならん

や、父の住み玉ふ所、父の愛の顯はるゝ所、天にもあれ、地にもあれ、此世にも未來にもあれ、悉く我父の家なる也。

夫れ宇宙は廣大也、日月あり、星辰あり、諸天の天あり。然れども是れ悉く同一なる神の造り玉ふ所にして、同一なる神の靈の寓り玉ふ所也。天は高く地は低く其相違甚だ大なるが如しと雖も、是れ同一なる家の第宅に過ぎざるのみ。

吾人は屢々此の廣大なる宇宙に壓迫せらるゝが如く感ずることあり、寄蜉蝣於天地、渺滄海之一粟、哀吾生也須臾、羨長江之無窮とは唯に蘇子の歎のみに非ずして、吾人も亦屢々しかく感ずることある也。若し、夫れ、單に、科學の立場より之を見んか、宇宙は、勢力の貯藏所たるに過ぎず、若し、夫れ、單に、宿命論者の見地より之を見んか、天地は、運命の支配する所、ならんのみ。若し夫れ宇宙を支配するもの盲目なる勢力、盲目なる運命なりせば、吾人假令聲をからして天に訴へ、地に叫ぶも天地豈吾人に答へんや吾人のしかく感ずるも亦宜なりといふべし。

然れども吾人は神に感謝す、天地は盲目なる勢力、盲目なる運命の支配する處に非ずして我が父の家、地、天の頂より地の底に至るまで父が自ら築き自ら住み玉ふ家也。天は神の坐位にして地は神の足臺也。吾人は何處に往くも、如何なる有樣に在るも尚我父の家に在る也。吾人又何ぞ愛へ、悲しみ、恐れ、失望するを要せんや。

我父の家　（二）

（二）人の趣味性情を咎むべからず

世界は我父の家也、父の家には第宅多し。我父は實に相異れる性情、相異れる嗜好を有せる多くの人を包容し玉ふ也。

吾人の住する狹小なる家宅に就て之を見るも尙數箇の室を有するを見るべし。書齋ありて此處に讀書すべく、寢室ありて此處に睡眠すべし隱居室は老人の閑日月を送る處、小兒室は童男童女の遊戯する所也。其他下僕の爲に設けられたる室あるべく、下婢の爲に備へられたる室あるべし。狹小なる吾人の家宅尙此多くの相異れる人々を包容す。況や廣大なる我父の家に於てをや。

若し主人が書齋に入りて拮々讀書に耽らば吾人は其家事に用なしと云ふの故を以て之を咎むべきか。若し主婦が厨房に入りて營々割烹に從事せば吾人は其讀書せずといふの故を以て之を非難すべきか。何ぞ夫れ然らん。彼等は其與へられたる性情と天職とに從て各々其分を盡すのみ。

人の性情と嗜好とは各々相異なり。活潑なるものあり、柔和なるものあり、剛直なるものあり、讀書を好むものあり、事業を好むものあり、算數の才能を有するものあり、音樂の趣味を有するものあり、世界は此等の人の包容し、又實に是等の人を要する也。吾人亦何ぞ人の性情を咎め、人の趣味を非難すべけんや。

教會も亦異なれる性情と異なれる趣味とを要す。教役者をして悉く同一の模型に入れしめんとし、信徒をして悉く同一の軌道を走らしめんとす、誤れるも亦甚し。マルタは神經質の婦人なりき。彼れ其妹マリアの獨り耶蘇の足下に坐して道を學ぶを見て憤悶に堪えず、來りて耶蘇に訴へて云く、『主よ我が姉妹我を一人遺して勞動かしむるを何とも思はざるか。彼に命じて我を助けしめよ』と。彼は凡ての人をして彼の如くはたらかしめんとしたりし也。然り、教會は實に彼の如く甲斐々々しく立ちはたらく教役者と信徒を要する也。然れども吾人は亦マリアの

如く靜に道を學ぶものゝ極て必要なるを忘る可らず。

昔者曾て英國が宗教上の事より西班牙と爭端を開くや學國の愛國心は勃然として起り、其アーマダ艦隊を擊沈するや倫敦滿市の人民は狂氣の如く東奔西馳して其大勝利を祝したりき。然るにシエークスピーアは是等の實境を目擊し乍ら冷然として更に國民の流行熱に罹らざりき。ゲーテに於ても亦然り擧國力を盡してナポレオンを破らんとしアルント、ケルチル亞流は盛に軍歌を作りて國民を皷舞したりし中に在りて獨り自ら花月に吟咏し更に砲聲を聞かざりしものゝ如くなりき。ショーペンハウエルに至ては普軍の佛軍に欺かれ伯林の危殆に迫るや難をルードルスタートの客舍に避け、エナ大學に呈出する博士論文を起草しつゝありき。戰爭に熱狂せる徒より之を見れば彼等は冷淡にして國を愛することを知らざる賤奴のみ。而かも英國はシエークスピーアに依て其光榮を增し、普國はゲーテ、ショウペンハウエルに負ふ所大なるに非ずや。教會の事に至ても亦然り。吾人は熖々たる靈火を燃して熱狂せる信仰の徒を有すると共に冷然として深く心を學に潛むる篤學の士をも有せざる可らず。彼れ我れと道を同ふせざるの故を以て猥りに彼を議す可けんや。

昔し菅茶山は雅事の說を作て、凡そ雅事と用事と兼ねざるは眞の雅事に非ずといへり。然れども風雅を重するものは唯風雅の點より事物を觀察し、實用を重するものは唯實用の點より事物を論ずるは世人の通弊也。余はマリアと或弟子との話を讀んで世人の偏見常に此の如きものあるを思はずんばあらず。マリア嘗て價貴き香膏を持ち來りて耶蘇の首に塗りたり、其弟子之を見て怒を含みて云く『此藥費の事を爲すは何故ぞや、若し之を賣らば多の金を得て貧者に施すを得ん』と。耶蘇の

弟子等は此點に於て實に實利論者なりき、彼等は唯實利の點よりマリアの行爲を觀察したりき。然れども耶蘇は何と云へりしぞ。試に彼の云ふ所を聞くべし。云く、『何ぞ此婦を惱すや、彼は我に善事を行へる也』と世は唯に實用家を要するのみならず又詩人をも要する也。『詩を作るより田を作れ』とは事の全体を知らざるものゝ言のみ。教會の事業も亦然り、資金の募集も必要なるべく、花を飾るも必要なるべく、説教家も必要なるべく、音樂家も必要なるべし。彼れ我れならざるが故に必要ならずといふ豈此の理あらんや。

我父の家には第宅多し。彼は實に凡ての性情、凡ての趣味を容るゝ也。猥りに狹隘の心を以て人の趣味、性情を咎め、悉く之を己と同一化せんとす、思はざるの甚しきものといふべし。

我父の家（三）

（凡てのクリスチアンは祭司也）

我父の家には第宅多し。故に凡ての職業を包容す。凡ての職業は皆神聖なる也。

吾人屢々傳道の職を稱して聖職と云ひ、傳道の事業を稱して神の事業也といふ。是れ素より不可なし。然れども聖職豈唯傳道の職のみならんや、神の事業豈唯傳道の事業のみならんや。

吾人は又屢々神の國と教會とを同一視し、教會の事業を以て神の國の事業の全体也となすとあり。然れども神の國は人生の全体に關す、教會と、宗教とは人生の最も重要なる部分也と雖も之を神の國より見れば其一部分たるに過ぎざるのみ。

聖書に云く、『人はパンのみにて生くるものに非ず唯神の口より出る凡の言に因る』と。既にパンのみにて生くるものに非ずといふ。パンの生活に必要なるは言ふ迄もなし。神の國豈全くパンの問題を度外視するものならんや。

吾人は信ず、神の國は宗教を包容するが如くに亦政治、文學、美術、科學及び農、商、工業をも包容する也。而して是等のものは各々神の國の一部を形造り、相依り相助けて以て全体の發達を謀る也。然らば則ち神の國の事業を進捗するもの豈唯に牧師、傳道者のみならんや、政治家も文學者も、美術家も、科學家も、實業家も共に相助けて神の國を建設する也。

故に吾人は凡ての職業を尊敬す、天下亦豈聖職ならざるものあらんや。吾人は須らく己の才能に從て各々自ら適する所のものを擇むべし、亦何ぞ此を優れりとし、彼を劣れりとせんや。

然りと雖も凡ての政治家、凡ての文學者、凡ての美術家、凡ての科學者、凡ての實業家悉く神の國を建設する者には非ず。宗教は神の國の全体に非ずと雖も其中心也。其基礎也。神の國とは神を中心として立つ所の王國也。神の權威と聖旨とが天に行はるゝが如く地に行はるゝの謂也。故に神の國を建設せんとする政治家は必らず神を信ずるものならざる可らず。神の國の事業に與らんとする文學者、美術家、科學者、實業家は己れ先づ宗教なる基礎の上に立たざるべからず。醜業婦と戯るゝの政治家、淫靡を歌ふの文學者、卑猥を畫くの美術家、物質より外何物をも知らざる科學者、金錢を儲くるより外何事をも知らざる實業家は素より此高尚なる事業に關係することを能はず。

既に宗教を基礎とし、天を敬し神を信ず、又何ぞ牧師と云ひ、傳道者と云はん。凡ての職業は神聖にして、凡ての人は牧師、傳道者たる也。

人、或は、謂、へ、らく、宗、教、家、と、は、直、接、に、神、に、奉、事、し、說、教、傳、道、を、以、て、其、職、と、爲、せ、る、もの、也、と、是、れ、唯、狹、義、に、於、て、然、る、のみ、廣、義、に、於、ては、凡、ての、クリスチャンは、悉、く、宗、教、家、也、故に使徒保羅は云く、『兄弟よ我神の諸の慈悲を以て爾曹に勸む、其身を神の意に適ふ聖き活る祭物となして神に献げよ、是當然の祭也』と。保羅豈說教家、傳道者に就てのみ云はんや、凡ての基督教徒は自己と其業務とを犧牲として神の祭壇に献げざる可らず。既に之れを神の祭壇に献ぐ、其業務の何なると、其行爲の如何なると、とに拘はらず、是れ悉く宗教なる也。

去らば學校に教ふる所の教師よ、其教ふる所を神に献げよ、學校に學ぶ所の學生よ、其學ぶ所を神に献げよ、堂々天下の大權を握る政治家、營々算籌に忙はしき商法家、星を戴て出で月を踏で歸る農夫、一年三百六十五日黑煙に燻れつゝ機械と共に機械的の生活を爲す職工、若し其爲す所の事業を以て神に獻げば何れか宗教家ならざらん、我父の家には第宅多し、又何ぞ此職業と云ひ彼職業と云はん、凡ての職業は悉く神聖にして皆神の國を建設するに與て力ある也。

神の國は快樂を排斥すべきか清教徒は曾て凡ての快樂を以て神の國に適はざるものとして、之を教會以外に放逐せんと試みたりき、然れども若し勤勞の後に安息を要すとせば嚴肅と共に又快樂をも要せざらんや。預言者云く、『市の街は街に遊べる子息、息女にて滿さるべし』と。市街とは神の國の謂也。神の國豈悉く快樂を禁ぜんや。無邪氣なる快樂、聖められたる快樂は聖められたる勞動と共に之を宗教といふも可也。ピショップ、ホエトリー云く、『クリスチアンをして快樂の曠野を輕侮せしむる勿れ』と。吾人は清教徒的精神を以て猥りに快樂を侮蔑し、世の青年をして基督教は乾燥無味にして青年の堪ふる所に非ずと思惟せ

しむべからず。我父の家には第宅多し、豈快樂を容るゝの餘地なからんや。

我父の家（四）

（神學の異教を容るべし）

世に固陋頑冥なる宗教家あり、思へらく我が信ずる所獨り是にして、之と異なる所のものは悉く異端邪説也と。於是辯難攻擊他を排斥せずんば止まざらんとす、古今の宗教史は實に這般の事例に乏しからず。人は自ら主張する所無るべからず、主張なきは主義なき也、主義なきは人物なき也。自ら眞理也と信ずる所のものを以て敢て天下に主張す、是れ宗教家の事也。是れなくんば吾人何れの處にか其宗教家たるを認めん。

旗幟を鮮明にすべしとは又吾人の屢々聞ける處なり。然り、吾人既に各自ら信ずる所あり、其信ずる處を標榜して天下に呼號す、是れ道を天下に傳へんとするものゝ須く取るべき道也。何の不可なることか是れあらん。

然りと雖も自ら信ずる所を信じ、而して之を天下に傳ふると、他を攻擊して之を排擠せんとするとは自ら異れり。破邪顯正の二者素より時として共に必要ならざるに非ず。而かも邪と信ずるもの却て正に、正と信ずるもの却て邪なるとあるは宗教史上稀有の例に非ず。世は常に預言者の墓を立て義人の碑を飾る也。吾人豈猥りに自ら正と稱し他を邪として排擊すべけんや

我父の家には第宅多し。試に之を神學説の上に就て考へんか、是れ豈諸種の異説を包容すべきを教ふるものに非ずや。

昔者マルチン、ルーテル、サキソンの一農夫に逢ひ試に其信仰箇條を諳

誦せんことを求む。農夫聲に應じて云く、『我は天地の造主能はざる所なき父なる神を信ず』と。ルーテル遮て問て云く、『能はざる所なき』とは何ぞ。農夫答へて云く、『我れ之を知らず』と。於是ルーテルは嚴然として農夫に告げて云く、『我が愛する友よ、汝の言ふ所眞也、余も世の凡ての學者も『能はざる所なき』と云へる言の意義を說明し得ざる也』と。誰れか神の深事を究むることを得ん。誰れか全能者を全く窮むることを得ん。(約百記十一の七)吾人が知る所は唯其一端のみ、吾人が聞く所は唯其微なる耳語のみ。(約百記廿五の十四)然るに眞理を以て自己の專有物となし、傲然として云ふ、我が信ずる所は眞理也、凡て之に異なるものは異端邪說也と。思はざるも又甚しと云ふべし。吾人は是に於て寧ろサキンン農夫の謙遜を學ばざるべからず。

且夫れ吾人思考の法は人に依りて異り、人種に依りて異り、境遇に依りて異り、教育に依りて異り、之を同一模型の中に入れんとす。素より能ふべきに非ざる也。試に宗教改革家に就て之を見よ。均しく是れ羅馬教に反對して起れるもの也。而かもルーテルはズウキングリーと異り、ズウキングリーはカルビンと同じからず。彼等は實に各々自己思考の法を有し自己之を顯はすの法を有したりき。故に彼等の神學は彼此相同じからず、彼等の傳ふる所は各々相異れる也。而かも是れ均しく其督教の眞理を傳ふるもの、第宅多き我父の家は悉く之を包容して尚餘りある也。

羅馬教徒は新教を以て惡魔の製造したるものとなし、新教徒も亦羅馬教を以て誤謬と罪惡に滿てるもの也となす。兩者見地の異る自ら然らざるを得ずと雖も、一を以て悉く眞理也となし、他を以て悉く誤謬なりとなす、寧ろ偏狹の甚しきものに非ずや。吾人を以て之を見れば羅馬教

の神學にも尙多少の眞理あり、其敎會政治亦多少の特長を有する也。甚
疾に亡ぶべくして亡ひざるもの第宅多き我父の家之を包容するの餘
地を存するが爲に非ずや。

吾人は素より猥りに寬容を主張するものに非ず。吾人は自ら信ずる所
の神學を有し、自ら奉する所の信條を有す。吾人は一歩も吾人の信する
所を枉ぐること能はず。然れども吾人は之が爲に他人の信ずる所を以て
猥りに異端なりとし、邪說なりとして排擊するを好まず。吾人は自ら信
ずるの自由を有せんと欲するが故に、他人をしても亦自ら信ずるの自
由を有せしめんことを欲す。吾人は自己の信仰を尊重するが故に他人
の信仰をも尊重す。吾人は我父の家の吾人よりも大なるを信ずる也。
使徒約翰は激情の人也。彼れ曾て雷の子と稱せらる、蓋し其過激の性情
を形容せる也。彼れ一日基督の許に來りて告げて云く、『師よ我儕に從は

ざるものゝ爾の名に托りて惡鬼を逐ひ出せるを見しが我儕に從はざ
るが故之を禁めたり』と。彼は自己の如くならざるものは基督の敵也と
信じたりし也。然れ共基督は更に寬容の精神を以て之に答へ玉へり。云
く、『其人を禁むる勿れ。蓋我名に依り異なる能を行ひて輕易しく我を
誹り得る者はあらじ、我儕に敵たはざるものは我儕に屬くもの也』と。
吾人は基督敎なるものは基督敎會よりも大なるものなるを知らざる
べからず。基督に屬くもの豈唯に敎會に屬するものゝみならんや。我父
の家には第宅多し。神はエリヤの知らざる七千人を遺し玉ふ也。
況や此敎會のみ獨り基督に屬し、此神學のみ獨り正統ならんや。彼敎會
も亦天より興へられたる任務を有し、彼神學も亦眞理の一端を表明す。
吾人は基督敎は所謂正統神學よりも大にして、基督敎の生活は正統敎
會よりも大なるを信するもの也。

禮拜の方法則ち儀文典禮と稱するものに至ても亦然り吾人は一の儀式を以て獨り神の靈の宿り玉ふ所にして他の儀式を以て悪く惡魔の製造したるものとなすべからず此等の儀式典禮各々其適する所のものあり會衆派の單純なる監督派の莊嚴なる長老派の秩序的なるメソヂスト派の熱實なる各々其特長を有す吾人各々性情の向ふ所に從て之を採用せば可也又何ぞ此をよしとし彼を惡しゝとするを要せん我我父の家には第宅多し吾人猥りに神の納け玉ふ所を擯斥すべからず基督教會の歴史は曾て神學上の紛爭宗派的嫉妬を以て滿されたりき今日に至りても尚多少此弊なきに非ず夫の異端征伐の如き吾人は今日も尚時として之を聞かざるに非ず然れども歐米の基督教會が一般に寛容の精神に養はれつゝあるは明なる事實にして所謂辯難的の時代は既に過ぎ去れり是れ吾人の深く喜ぶ所也我國の基督教會は建設日淺くして未だ歐米に在る基督教會の如き歴史を有せざるが故に所謂宗派的嫉妬神學的紛爭なるものを有せざるは誠に幸福の至り也故に吾人は最も注意して此新聖なる歴史に汚點を留めしむべからず是れ實に吾人教會擁護の任に在るものゝ義務也とす

異教に對する態度

基督教と異教とは其根本に於て絶對的に相違し反對せるものなり基督教的文明と異教的文明との間には到底越ゆ可らざる深淵の横れるものなりや吾人が異教に對する態度は此根本問題の決定如何に依て決定せざる可らず

基督教は天啓の宗教にして異教は人の思想より案出せる宗教也基督教は眞の宗教にして異教は僞の宗教也基督教は神より出でたる宗教

にして、異教は惡魔より出でたる宗教也と云へるが如き言は、吾人の曾て屢々基督教徒の口より聞きし處にして、今日も亦全く斯る說を主張するものなきに非ず。

此說にして眞なりとせば、神は數千年間異教國民を惡魔の手に委したりしと假定せざる可らず。吾人は素より神の深遠なる目的と、秘奧なる政策とを了解すること能はず、然れ共吾人は神は萬民の父にして、獨り一種族、一國民の神に非ざるを信ず。故に吾人は或種族、或國民には惡魔より出でたる宗教を與へ、他の種族、他の國民には己より出でたる宗教を與へたりと信ずること能はず。

昔者言語學の明ならざりし時、吾人は思へらく、蠻人の言語は缺舌に過ぎざるのみと。然れ共今や言語學は吾人に教へて云へり、凡ての言語には順序あり智惠あり、語法あり、意義あり、最も野蠻なる國民の言語中にも尙壯大なるものと美麗なるものなくんばあらずと。吾人が嘗て蠻人の言語を以て缺舌に過ぎずとなしたりしものは、曾て之を學びたることなかりしが爲めのみ。宗教も亦然らざらんや。異教を以て惡魔より出でたる僞りの宗教の如く思惟するは、畢竟異教の何物たるやを知らざるが爲めのみ。一たび宗教學にして明ならんには異教なるものゝ中にも亦眞理の存在するを發見すべき也。

果然比較宗教學は吾人に教へて云へり、凡ての宗教は悉く眞理を包含す。最も不完全にして墮落せるものも亦神聖なる或物を有す。何となれば凡ての宗教には皆神を求むる神聖なる渴仰の存するものあれば也と。

吾人は素より基督教と異教との間に幾多の相違あるを認めずんはあらず。然れ共兩者の相違は眞僞の相違に非ずして、完全不完全の相違也。

何れか最も多く眞理を包有し、何れか最も多く光明を有するかの相違也。吾人は宗教なるものに惡魔より出でたるものあるを信ずると能はず。

基督教は天啓の宗教也といふ、吾人も亦其然るを信ず、然れ共其所謂基督教とは何ぞ。若し基督教とは信仰箇條を有し、禮拜の儀式を有し、教會政治を有するもの也と云はゞ、是れ亦人類の案出せるものに外ならず、何となれば此等のものを有する今日の宗教は俄に天より降り來りたるものに非ずして、二千年間或は希臘思想の感化を受け、或は羅馬思想の影響を蒙り、漸次成長發達し來りたるものなれば也。凡ての宗教に於て『或は揣摩うる事あらんため神を求むる』渴仰心の存するは、是れ神より出でたる證據也。善樹は惡しき果を結ぶ能はず、眞理は惡魔より來る能はず。凡ての宗教が眞理を有する限り、吾人は之を神に歸せざる可らず。

如上の言にして眞なるべくんば、吾人が異教に對する態度知るべきのみ。

吾人は素より猥りに異教に諂讓し、之と調和するを以て可也といふものに非ず。然れ共異教と云へば猥りに之を惡しきものと認定し、其儀式、習慣を悉く破壞するを以て策の得たる者となすが如きは偏狹の甚しき者にして、唯に無益の爭論を生ずるのみならず、折角吾人の傳へんとする眞理も之が爲めに壅塞せらるべし。吾人は如何なる場合にも頑冥偏狹とに贊成すると能はず。

吾人の知れる一人の女宣教師は其至る所に先づ佛壇を破壞すべきを說けり。既に一たび基督の道を信ずるに至らば、亦誰か佛壇に禮拜するものあらん、其之を有すると否と殆ど何の關係あらざる也。未だ基督の

道を知らざるもの、其何が故に佛壇を破壞すべきを知らざる也。而して先つ之を破壞すべきを強ふ、徒に基督の道を厭ふて眞理に耳を塞がしむるのみ。夫の女宣教師が何人をも悔改せしむると能はず、却て人をして基督教に反對するの心を起さしめたるもの故なきに非ず。

吾人は異教徒に道を傳ふるに方りて、保羅の智惠と寛大とを思はずんばあらず。彼れアデンスに至り、アレオ山上に立ち述べて曰ひけるは、『アテンスの人よ、我れ爾曹が毎事に鬼神を敬ふの甚しきを觀る、我れ途を行く時爾曹が敬拜ところの者を見しに識らざる神にと刻書し一の祭壇を見出せり、故に爾曹が識らずして敬ふ此者を我爾曹に示さん』と。斯くて彼は彼の傳ふの神は、即ち彼等の所謂識らざる神にして、天地の主也とのことを諄々として說教したりき。彼は徒にアテンス人の迷信を攻擊し、彼等の造りたる祭壇を破壞せよと命ぜざりし也。否彼は却て彼等の敬神を稱讃し、彼等の造れる祭壇を利用して、之に依て眞神を致へたりし也。是れ豈吾人の學ぶべき處に非ずや。

宗教小觀　終

9/39

明治卅七年三月廿二日印刷
明治卅七年三月廿九日發行

著者　高木壬太郎

發行者　堀田達治
東京京橋區銀座四丁目三番地

印刷者　米田長太郎
東京府豐多摩郡澁谷村大字青山南町七丁目二番地

發行所　教文館
東京京橋區銀座四丁目三番地

印刷所　青山印刷所
東京府豐多摩郡澁谷村大字青山南町七丁目一番地

4-0

97
166

020708-000-3

97-165

宗教小観

高木　壬太郎／著

M37

ABI-0528